

後活動を是非見てみたいと思っている。それは、42年に及ぶ「東南アジア青年の船」事業の具体的な成果である



からだ。青年の社会貢献精神がずっと続くように！



(5) 保健教育 (HIV/AIDS対策) グループ

ファシリテーター：上田 めぐみ

PY：34名

A. 焦点、目的、ゴール

焦点

日本及びASEAN 各国におけるHIV/AIDS 対策の現状を理解し、その上で、青年がどのようにHIV/AIDS 対策を含む保健教育に取り組んでいけるのか議論し、実行可能な活動案を発表する。

目的

- PYがHIV/AIDSについて正しい知識を持ち、その知識を他の人に伝えることができる。
- PYが各国で講じられているHIV/AIDS対策を理解し、自国で実現可能なアクションを起こす。

ゴール

- HIV/AIDSに関する基礎的な知識を発展させ、国ごとの課題を特定する。
- HIV/AIDS対策がどのようにASEAN各国や日本の保健教育に組み込まれているかを理解する。
- HIV/AIDS課題は社会的、文化的、経済的な要素と大きく関係していることを理解する。
- HIV/AIDSについてオープンに、自信を持って話せるようになる。
- HIV/AIDSとともに生きる人々（PLWHA）や感染リスクの高い人々をどのようにサポートできるか考えられるようになる。

B. 事前課題

個人課題1

以下の質問について、所定の用紙に記入する。

- DG5を選択した動機と、DG5への期待について50語以内で述べなさい。
- これまで、HIV/AIDSについて「いつ」「どこで」

- 「どのように」学んだかを100語以内で述べなさい。
- HIV/AIDSについて、あなたのイメージを10語以内で書きなさい。
 - 次のキーワードを定義しなさい。
「ジェンダー」「セクシュアリティ」「LGBT」
 - あなたの国でのLGBTを取り巻く状況について書きなさい。

個人課題2

HIV/AIDSについて事前学習し、以下についてそれぞれ50語以内で記述する。

- HIVとAIDSの違い
- どのように感染するか
- 感染はどのように判明するか
- 感染した場合、どのような治療法があるか
- 感染はどのように予防できるか
- HIV/AIDS以外の性感染症について

国別課題

自国のHIV/AIDSの状況や保健教育について調査し、国ごとにプレゼンテーション資料を準備すること。発表はMSパワーポイントを使用し、以下のポイントを含めて、各国最大10スライドまで、7分以内にまとめること。

- 統計データ（過去20年程度の変化や傾向がわかる感染率、死亡者数など）
- 国別の課題を抽出し、理由を考える
- 保健教育がどのようにHIV/AIDS課題に対応しているか説明する

C. 活動内容

日本での課題別視察

施設

- a. 特定非営利活動法人ぷれいす東京
- b. 特定非営利活動法人akta

活動

< 特定非営利活動法人ぷれいす東京 >

PYはぷれいす東京のスタッフによるワークショップを体験した。

- a. 小グループに分かれて名前をつける
- b. ワークショップでの目標を設定
- c. ぷれいす東京スタッフが団体やその活動について説明
- d. HIV陽性者の手記を読み、感想を共有
- e. 自国のHIV/AIDSの状況、青年として何ができるかを議論し、発表

< 特定非営利活動法人akta >

- a. 代表が日本のHIV/AIDSの状況やaktaの活動について発表
- b. 新宿に位置するコミュニティセンターを訪問し、LGBTやHIV/AIDSに関する啓発活動を視察

視察から学んだこと

- a. 私たちは既にPLWHAとともに生きており、HIV/AIDSを取り巻く課題は他人事ではなく自分の内面にあること
- b. 日本のHIV/AIDSにかかる現状
- c. 日本において、行政や支援団体から得られる治療、医学的・心理的ケア、サービス
- d. 啓発に関する広報戦略
- e. 日本のLGBTに対する社会的な認知が徐々に高まっていること

グループ・ディスカッションI

ねらい

- a. 個人目標の設定
- b. ディスカッションしやすい雰囲気づくり
- c. 日本での課題別視察の振り返り
- d. ジェンダーやセクシュアリティに関する知識の発展

活動

- a. 小グループに分かれ、それぞれの目標と個人課題1-aを共有する。
- b. ディスカッション中のルールを策定する。
- c. 日本での課題別視察を振り返り、キーワードを使って考察を共有する。
- d. 各国でのLGBTを取り巻く状況について情報交換する。

成果

- a. PYはDG 5を選択した動機と目標をグループ内で発表し、その後全体で共有した。また、それぞれの背景知識や知識レベルが異なるため、どのように互い

をサポートできるかを考えた。

- b. ディスカッションではセンシティブなテーマも扱うため、PYはセッション中のグラウンドルールについて議論し、合意した。ルールは模造紙に書き、毎回のセッション開始時に全員で読み上げた。内容の一部は以下のとおり。
 - ディスカッション中に話したことはグループ内に留める。
 - 人の意見をよく聞く。
 - 発表中に割り込んだり、評価したりしない。
 - 自分と違う意見も受け入れ、尊重する。
 - 自分の知識や経験を自由に共有する。
 - 互いに助け合い、愛し合う。
 - 時間を守る。
- c. PYは東京での課題別視察での学びや発見について共有した。多くのPYにとってPLWHと出会うのは初めての経験で、HIV陽性者が自分と変わらない生活を送っていることに気づいた。また、実際に自分は既に多くのPLWHと生きていることを知る機会になった。
- d. 課題別視察での学びをもとに、PYは自国でのLGBTの状況、権利、ステイタス、社会的な認知、法律の点で情報交換し、国によって同じ点、異なる点について理解を深めた。グループでの発表によれば、いくつかの国ではLGBTは精神疾患やトラブルメーカーのように捉えられ、スティグマを助長している。例えば、マレーシアではLGBTは社会的に認識されておらず、トランスジェンダーは逮捕されることもある。

グループ・ディスカッションII

ねらい

- a. HIV/AIDSについて正確な知識を得る
- b. 感染リスクのある行動について、アサーティブなコミュニケーションを学ぶ

活動

- a. 個人課題2を参照し、HIV/AIDSの基礎情報についてグループごとにディスカッションする
- b. クイズセッション
- c. 「今夜のふたり」ワーク

成果

- a. PYは小グループに分かれ、個人課題2に基づき、(1) HIVとAIDSの違い(2) 感染経路(3) HIV検査(4) 治療(5) 予防(6) 他の性感染症の説明のうち、各グループ1つの課題について話し合い、結果を全員に共有した。PYはHIV/AIDSの基礎知識を確認するとともに、誤った認識を修正した。
- b. 前のワークをもとに、PYはファシリテーターが準備したクイズに答えて知識を深めた。

- c. 「今夜のふたり」は、パートナーとのコミュニケーションの重要性を知るためのアクティビティである。PYは6グループに分かれ、そのうち3グループはパートナーと今夜「セックスしたい」、他のグループは「セックスしたくない」役割を設定する。PYは自分の気持ちを相手にどのように伝え、言葉やしぐさで相手を納得させ、お互いにセックスするかしないかを適切に合意するかをグループごとに考えた。その後、「セックスしたい」グループと「セックスしたくない」グループを統合してロールプレイを行い、PYがディスカッションで話した内容を実行に移した。

このアクティビティを通じて、PYは、どのようにパートナーの意思を尊重するかを学び、コミュニケーションが望まないセックスや感染症予防の効果的なツールのひとつになり得ることに気づいた。

フィリピンでの課題別視察

施設：サン・ラザロ病院、ピノイ・プラス財団
活動

- 医師よりフィリピンのHIV/AIDSの現状やサン・ラザロ病院についてプレゼンテーション
- ピノイ・プラス財団について説明
- ピノイ・プラス財団メンバーとの交流
- 外来、検査棟、カウンセリング棟の視察

視察から学んだこと

- 新規感染者数が増加傾向にある、フィリピンのHIV/AIDSの現状
- 病院で受けられる治療、ケア、サービス
- PLWHAをサポートするために実施する、病院とピノイ・プラス財団との協働活動

グループ・ディスカッションIII

ねらい

- フィリピンでの課題別視察の振り返り
 - 日本とASEAN各国のHIV/AIDSの状況と対策を学ぶ
- 活動
- フィリピンでの課題別視察について小グループでのディスカッション
 - 国別課題に基づき、自国のHIV/AIDS状況についての国別発表

成果

- PYはフィリピンでの課題別視察における学びや発見を共有した。PYが出会ったピノイ・プラス財団のメンバーがすべてPLWHであることに気づき、HIV陽性者を怖がる必要はなく、私たちは既にLGBTやPLWHAとともに生きている事実を改めて認識した。
- PYは各国のHIV/AIDSの状況について理解を深めた。発表の概要は以下の通り。

<シンガポール>

HIV感染率は低いが、新規感染者数は増加している。主な課題はスティグマや差別。雇用前にHIV検査を義務づける会社もあり、HIV陽性が判明した場合は、不採用になることもある。また、外国人がシンガポールで学生ビザや就労ビザを申請する場合はHIV感染の有無を開示することが求められる。

<フィリピン>

WHOの統計によれば、感染率は2001年から2009年の間に25%増加した。課題はスティグマと情報不足。政府はHIV予防に関する法律を制定し保健教育を促進しているが、キーポピュレーション(HIV感染の高いリスクにさらされやすいグループ)には十分に啓発が届いていない。

<マレーシア>

新規感染者数は2002年をピークに大きく減少している。しかし、国の統計では感染経路の傾向が、注射針の共有から性的接触に変化している。また、結婚前のカップルはHIV検査を受けることを推奨されており、どちらかが陽性と判明した場合、子どもを持つことを勧められないという。

<ベトナム>

統計によれば新規感染者数は減少傾向にあるが、知識不足のため引き起こされる、スティグマや差別は残っている。キーポピュレーションは女性のセックスワーカーやMSM(男性とセックスする男性)。政府はHIV根絶を目指し、特に5つの州で90-90-90プログラム(HIV陽性者の90%が検査を受けてHIVに感染していることを知り、そのうち90%がHIV治療を受け、さらにそのうちの90%が治療の効果で体内のウイルス量が検出限界以下になっている状態を目指すという国連合同エイズ計画の方針)を実施している。

<インドネシア>

新規感染者の年齢層は20代から30代に集中している。主な感染経路は異性間の性的接触で、過去27年間で60%のケースを示している。伝統的に結婚前のセックスは不道德とされる一方で、近年は若年層がキーポピュレーションとされる。他に影響を受けやすいのは主婦。政府やNGOがプログラムを実施中。

<日本>

日本は世界の先進国の中で唯一新規感染者数が増加している国。主な感染経路は異性間の性的接触だが、新規感染者数を見ると同性間の接触が横ばい状態。行政は無料HIV検査を提供しており、2014年には145,048人が受診した。これは前年より8,648多い。現在は中学校、高

校の授業でHIV/AIDSについて学ぶことになっている。

グループ・ディスカッションIV

ねらい

- 日本とASEAN各国のHIV/AIDSの状況と各国の対策を学ぶ。
- HIV/AIDSに関する国別課題を特定する。
- HIV/AIDS課題には様々な要素が関連していることを認識する。

活動

- 国別事前課題に基づき、HIV/AIDSの状況についての国別発表（前回からの続き）
- 国別課題を特定するためのグループディスカッション
- どのような要素がHIV/AIDS課題に関連しているのか、誰が最も影響を受けやすいのかをブレインストーミング

成果

- PYは各国のHIV/AIDSの状況について理解を深めた。発表の要旨は以下の通り。

<カンボジア>

国内での初の感染者は1991年に報告された。1998年から新規感染者数は減少傾向にあり15歳から49歳の感染率は0.7%。主な経路は夫から妻(30%)への感染。政府は2020年までに新規感染者をゼロにする取組を進めている。

一方で、2014年にバタンバン州の村でHIVの集団感染が発生した。無資格の看護師が注射針を使い回し、住民251人が感染したと報告されている。

<ラオス>

初の感染者は1990年に報告された。国内の感染率は低い、新規感染者数は増加傾向にある。主な感染経路は男性同士の性的接触であるが、キーボピュレーションには主婦や労働者も挙げられる。

<ブルネイ>

宗教的な背景のため、HIV/AIDSに関する情報が非常に限られる。また、同性同士のセックスは違法でありMSMに関する課題は国内でも明らかにされていない。1986年から2012年にかけて計81人のHIV陽性者が報告されており、そのうち74%が男性。20歳～29歳が最も多い。治療やケアは行政より無料で受けられるが、学校カリキュラムに性教育は含まれない。コンドーム配布も宗教的理由から困難である。

<ミャンマー>

統計によれば薬物使用者のHIV感染が最も多い。2011

年、3500件の新規感染者数と14000件のエイズ関連死が報告され、ピークと考えられる。しかし、村落部での啓発が難しいため、今後数年の間にエイズ関連死は増加すると政府は予測している。課題は方針や法的枠組みの改正。

<タイ>

発表はロールプレイ形式で行われた。タイでは過去10年に379,049人がART（抗レトロウイルス療法）を受けている。2016年までに新規感染者数半減が目標。主な課題はスティグマや差別。

- 発表後に国別グループでのディスカッションを行い、PYは国ごとの課題を特定した。結果的に、各国に共通する以下の6つの課題を抽出した。
 - スティグマ
 - 新規感染者数の増加
 - セックスワーカー
 - MSM（男性とセックスする男性）
 - 薬物使用者
 - 主婦への感染

- 6つの課題を基に、PYはブレインストームし、どのような要素がこれらの課題を生み出しているのかを発見した。また、それぞれの課題のキーボピュレーションと関係者を特定した。その結果、HIV/AIDS課題が様々な社会的、文化的、経済的要素に関わっており、各国で共通の、また異なった課題があること理解した。

グループ・ディスカッションV

ねらい

- 知識をどのように他の人に伝えるかを考える。
- PLWHAや高いHIV感染リスクのある人たちをどのようにサポートしたらよいかを学ぶ。

活動

- 小グループによるロールプレイ
PYは6グループに分かれ、各グループにそれぞれ異なるキーボピュレーションが書かれた紙が配布される。グループはその人物を中心とする5～7分のドラマを考え、台本をつくる。設定や配役は自由だが、グループ全員が少なくとも一人の役割を与えられ、ドラマは主人公をどのようにサポートするかを表現しなければならない。
配布されたキーボピュレーションは以下の通り。
 - MSM（男性とセックスする男性）
 - セックスワーカー
 - HIV陽性の妊婦
 - 母子感染した子ども
 - 薬物使用者

- 思春期の少女

b. 役割を演じた上での学び、発見を共有する

成果

- a. PYは自由な発想で背景、状況、関係者を設定し、グループごとにドラマを発表した。すべてのグループがドラマの中に、ディスカッション活動で学んだ社会的、文化的、経済的課題をうまく取り入れていた。さらに、PYはなぜ主人公がHIVの高いリスクにさらされやすいのかを考え、支援が必要とする人をどのようにサポートしたらよいかを表現できた。
- b. PYは「もし自分が、または自分の家族や友人がHIV陽性だったら」どう思うか、どのように対応したらよいかを想像できるようになった。また、PYは正しい知識を得て周りに伝え、人々をサポートすることの重要性を確認した。最終的に、HIV/AIDS課題は健康問題だけでなく、人権、尊厳、生活の質にも関わる課題であることを共有できた。

D. 決意・期待される今後の活動

12月1日の「世界エイズデー」を記念して、DG5では3種類の船内活動を企画、実施した。これらはファシリテーターから学んだプロジェクトマネジメントのプロセスにのっとり、PYはロールプレイ、活動、ロジスティクス、広報の小委員会に分かれて準備を行った。センシティブなテーマであることから、PYはあらかじめファシリテーターの助言のもと企画書を作成し、管理部へ提出した。船内活動の概要と成果は以下の通り。

a. レインボーパレード

日程：2015年12月1日

時間：13:15-13:45

場所：ダイニングホール

活動概要：HIV/AIDSについてDG5以外のPYの関心も高めるため、PYは昼食時間にダイニングホールを行進した。PYはトランスジェンダーに扮したり、メッセージを書いたプラカード掲げるなどの工夫をした。

b. レッドリボンサインボード

日程：2015年12月1日

時間：終日

場所：2階ダイニングホール前

活動概要：HIV/AIDSとともに生きる人々へのサポートを表明するため、PYは模造紙に大きなレッドリボンを描いてホワイトボードに掲示し、共感するPYたちに署名を依頼した。合計184人の協力を得ることができた。

「世界エイズデー」の前日、PYはこのイベントについてモーニング・アセンブリーで周知し、当日はPYや管理部員に白いシャツを着ること、DGメンバーが配布し

たレッドリボンをつけることを依頼した。

c. 自主活動

日程：2015年12月3日

時間：21:00-22:10

場所：海ラウンジ

活動概要

(1) ロールプレイ

PYはこれまでのセッションの学びに基づき、HIVに感染した女性セックスワーカーに関するドラマをつくり、発表した。ストーリーはセックスワーカーへの偏見を誇張した部分も見受けられたが、DG5の代表のひとりが上演の最後に、この活動の目的を説明し、セックスワーカーへのスティグマを軽減することができた。

(2) ブースごとの発表

- HIV/AIDS基本情報
- 性感染症ステーション
- コンドーム装着デモンストレーション
- コンドームケースのデザイン
- クイズステーション
- 写真ブース

自主活動でDG5は以上の6種類のブースを設置した。参加促進への工夫として、各ブースに立ち寄るとシールを発行し、参加者がすべてのブースを巡回してシールを6枚集めるとコンドームがプレゼントされた。

この活動は遅い時間帯の実施にも関わらず、80人以上の参加者を集めた。特に注目を集めたのはコンドームの装着デモンストレーションで、多くの参加者が小さなスプレーボトルをペニスに見立てて、DG5メンバーの指導のもと、コンドームを装着した。初めてコンドームに触れた参加者も多く、DG5以外のPYにも広くセーフターセックスを呼びかけることができた。同時に、この自主活動の成功により、PYが他の人に情報を伝える喜びを知り、HIV/AIDSに関連した課題やセーフターセックスについて、よりオープンに話すことへの自信が深まった。

E. 評価・反省（自己評価セッション）

a. 小グループでの評価

PYは第1回のセッションで所属したグループに分かれ、その際に目標を書いた模造紙を受け取った。内容をグループで再確認し、それぞれが目標の達成度合いをポストイットに記入、同じ模造紙に張り付けることで自身の活動を評価した。その後グループごとに発表して成果を共有した。

b. 個人評価

PYはすべてのセッションの成果を「キーワード」と

してまとめ、帰国後どのような行動を起こすかを考えた。それぞれがポストイット1枚の「キーワード」と1枚の「アクション」カードを持ち、各自の今後のコミットメントについて発表した。発表内容の一部を以下に紹介する。

<キーワード>

- 多くのPYが「変化」をキーワードとして挙げた。HIV陽性者やエイズ患者を恐れる必要はなく、私たちは既にPLWHAと一緒に生きていることを確認した。ディスカッションがPYの意識や行動変容をもたらした。
- 「シェア」を挙げたPYも多く、ディスカッションプログラムの成果を家族や友人、コミュニティに伝えて意識啓発をする重要性を話した。

<アクション>

- 多くのPYがコミュニティでの講演・講義や、ソーシャルメディアを用いたキャンペーン実施を通じて彼らの経験を伝えることを約束した。
- HIVは自分の問題にもなり得ることに気づいたと話すPYも多かった。ディスカッションやロールプレイがPLWHAへの共感につながった。
- あるPYは自分自身がHIV/AIDSについてひどい偏見を持っていたことを告白した。彼は国のHIV/AIDS評議会委員であるにもかかわらず、一度も会議に参加したことがなかった。彼は次回の会議には必ず参加し、情報を得ることを宣言した。
- あるPYは帰国したら必ずHIV検査を受けることを挙げた。彼女はフィリピンでの課題別視察でペアになったピノイ・プラス財団のメンバーと約束したため、それを守りたいと話した。

c. 南部アフリカ地域でのHIV/AIDS事業について発表
ファシリテーターが所属する日本赤十字社では、国際赤十字・赤新月社連盟を通じて、南部アフリカ地域でHIV/AIDSに関連する感染症対策事業を実施している。事業担当者であるファシリテーターが、事業ではどのようにHIV陽性者やエイズ患者をサポートしているのかを説明した。医療支援、生計支援、関係者への研修、赤十字ボランティアの活動の良い事例を発表した。

d. ファシリテーターからのメッセージ

すべてのディスカッションプログラムのまとめとして、ファシリテーターから「HIV/AIDS」「セックス」「ジェンダー、セクシュアリティの課題」についてPYへメッセージが伝えられた。

F. ファシリテーター所感

はじめに、内閣府や一般財団法人青少年国際交流推進センターの皆様にはファシリテーターとして本プログラムに参加する機会をいただいたことに感謝申し上げたい。日本とASEAN各国にとって歴史の深いプログラムに関われたことを大変光栄に思う。この場を借りて、今後のさらなるプログラムの発展のために、所感や提言を述べたい。

事前課題

事前課題は個人と国別に分かれており、PYのHIV/AIDSに関する基礎知識を高め、ディスカッションに備える内容となっていた。提出の多くが締め切り間際であったが、ほとんどがファシリテーターの目的や期待をカバーするものであった。PYはこれらの事前課題を基に、ディスカッションを通じて知識を深めることができた。

ユースリーダーズサミット(YLS)

YLSはPYにとって、日本からのローカルユースと出会う特別な機会であり、ディスカッションプログラムへの導入として理想的だった。YLSのメインテーマ「共生社会」はHIV/AIDSに関する様々な要素も含んでおり、船内プログラムへの橋渡しとしても役立った。

YLSにおいて、ファシリテーターは基本的にオブザーバーであり、グループによって介入のレベルは異なったが、ファシリテーターは参加者に十分に認識されていないという印象を持った。ファシリテーターは事前に参加者全員に紹介された方が好ましく、より効果的にYLSに貢献するためにも、役割を周知してほしい。

ファシリテーターにとっては、DG5参加青年の参加度合を、船内プログラム開始前に観察できる良い機会でもあった。

課題別視察

「ぶれいす東京」ならびに「akta」はともに、PLWHAやLGBTを支援する団体として、日本でも先駆的な団体である。実施されたワークショップやプレゼンテーションはPYにとって非常に素晴らしいもので、HIV/AIDSの啓発として船内プログラムへの良いスタートとなった。

マニラでの課題別視察では病院とNGOが協働する良好事例を見ることができた。ピノイ・プラス財団のメンバーはクリエイティブに活動を計画し、PYはメンバーとペアになって行動することができた。

日本、フィリピン、双方の課題別視察を通じて、PYの多くは初めてHIV陽性者と出会った。これによって自身の偏見に気づいたPYもいる。このような課題別視察の調整や、HIV陽性であることを話してくれた方々の勇

気に心から感謝したい。

ディスカッション

私のこのDGでの重点は、アクセスしやすい医学的な情報よりも、HIV/AIDSに関する社会的な課題について意識を高めてもらうことだった。それぞれのセッションでは、PYが自分自身の意識を変え、社会・文化的な規範に向き合うことで、PYの知識と行動が一致し、結果的にスティグマや差別が軽減されることを目指した。なぜなら私自身、オープンマインドでいることは、支援を必要とする多くの人々をサポートできると信じているからだ。

また、セッションは基本的にKJ法によるワークショップスタイルで実施した。PYは自分のアイデアを共有し、分類することがより簡単に、相互理解のもとで進められた。ロールプレイもPYの想像力を広げることができた。

私はプログラム開始前、このテーマがセンシティブであることから、PYの参加度合を懸念していた。しかし、すべてのPYがアクティブになり、彼女/彼らの文化的、宗教的背景を越えて、HIV/AIDSやセクシュアリティについて自由に話せるようになった。さらに、PYは自ら自主活動を実施することを決めて、実行した。

すべてのディスカッションプログラムの終了時には、PYそれぞれが今後の活動について自分なりのアイディ



アを得た。ファシリテーターにとって、PYの行動変容を見るのは大変嬉しく、DG5の成果として発表した最終プレゼンテーションでは「DG5は私の意識を変えた」と発表していたことはこの上ない喜びだった。

すべてのPYへ、積極的な参加とプログラムの無事終了を祝福したい。PYが自国で、または国境を越えて、この学びを行動に移し、ユースリーダーとして社会にインパクトをもたらすことを期待したい。PYはファシリテーターからの「性的指向やHIV感染の有無にかかわらず、自分らしくあれ」というメッセージを受け止め、多様性を促進してくれると信じている。

その他

最後に、SSEAYPファミリーの一員となれたことに改めてお礼を申し上げたい。私は既参加青年ではなく、今回が初めての参加だった。ファシリテーターとして素晴らしい経験ができたことから、このプログラムが既参加青年以外にも、もっと参加しやすいものであってほしいと願っている。既参加青年以外にも資格や意欲のある人材は必ずいると考える。

「東南アジア青年の船」事業のおかげで、人生の選択肢が増えたと感じている。次は私が、この経験を広く伝えて、将来のプログラムの発展に貢献したいと強く思う。



(6) 国際関係（日・ASEAN協力）グループ

ファシリテーター: Mr Aldecoa, Tito III Leduna

PY: 39

A. 焦点、目的、ゴール

焦点

日本とASEANの現在の協力関係を認識し、その上で、日本とASEANのこれからの協力関係と連携のために、ASEAN共同体構築後、青年がどのような取組ができるのかについて議論し、実行可能な活動案を発表する。

目的

参加青年は、

- 日本と東南アジア地域に関連した主要なテーマについて十分な知識を習得する。
- 日本とASEANの間での国際関係の諸要素について学ぶ。
- 事業後に、それぞれの国で何らかの活動に加わる。
- 社会と国の発展に寄与する。

ゴール

参加青年は、

- ファシリテーターと各参加青年たちの期待することを含めて、ディスカッション活動の目指すところをはっきりと理解する。
- グローバル化が、日本と東南アジア地域に及ぼす影響について学ぶ。
- 持続可能な地域社会を設計する方法と、そのような事業への参加・関与の方法を学ぶ。
- 各国における青年及び青年に関する問題について話し合う。東南アジア各国と日本における様々な青年の課題の取組や実際の経験の例から学ぶ。
- 青年によるプロジェクトや活動の立ち上げにとって重要な、ASEAN-Japan青年ネットワークを構築する。東南アジアと日本との間のこの情報ネットワークは、本事業での学びを各地域に還元する基盤となる。

B. 事前課題

個人課題：企業の社会貢献とあなたの役割

- 期待することを明確にする：個人としての自分自身を最もよく紹介できる自国のものを持参する。
- 日・ASEAN友好協力：日本とASEANの協力関係について、ASEANが政治、教育、環境、及び東南アジアでのエコツーリズムの各分野で果たす役割に注目してエッセイにまとめる（500語以内）。

基本事項：

- ASEANの意義はどこにあるか
 - 日・ASEAN友好協力の主な役割にはどのようなものがあるか
 - 日・ASEAN友好協力において、あなたの国はどのような役割をはたしているか。
- 持続可能性コンセプト：次の質問に回答する形で、持続可能性設計モデルについて調べる。
 - 持続可能性設計モデルを構成する主な要素は何か。様々な要素に言及すること。
 - 利用できるもの（資源）にはどのようなものがあるか。資源利用の方法及び資源の限界への対処法にも触れること。
 - 資源の有効利用を進める上での主な課題を挙げる。
 - ASEAN持続可能性決議に関する下記リンクの記事を読み、「私の理想とする日本とASEAN」という題で200語のエッセイを書く。
<http://www.asean.org/news/item/asean-declaration-on-environmental-sustainability>
 - Global Policy Forumによるグローバル化の解説（文化、政治、経済の視点から書かれたもの）を読む。

<https://www.globalpolicy.org/globalization.html>.

- 日本とASEANの関係に詳しい主要なリソースパーソンの1名にインタビューする。以下の事柄を取り上げること。
 - 日・ASEAN友好協力の歴史
 - 日・ASEAN友好協力が抱える課題
 - 日・ASEAN友好協力の今後
 協力関係に関する合計で10ほどの重要事項について質問し、回答を書き留める。

国別課題

- 日本と東南アジア各国の発展における青年層の現状
PYは、国ごとに地域開発の計画案を立て、パワーポイントを使ってクリエイティブな発表をする。以下の要素を含めること。
 - 地域社会の必要に適切に対応している成功事業例を、以下のフォーマットを使って報告する。

状況	解決方法	成果

- 地域事業におけるリーダーと関係各メンバーの役割は何か。
- この地域事業をほかの東南アジアの国や日本で応用するにはどうすればよいか。
- この地域事業の発案に対して、住民はどんな反応を示したか。
- あなた自身の地域社会が抱える課題から重要なもの一つを選び、その解決方法を考える。

b. 地域開発

- PYは、地域開発の計画案を作成し、以下の要素を取り入れて創造性のあるパワーポイント発表をする。
- 地域社会の必要に適切に対応している成功事業例を、以下のフォーマットを使って報告する。

状況	解決方法	成果

- 地域事業におけるリーダーと関係各メンバーの役割は何か。
- この地域事業をほかの東南アジアの国や日本で応用するにはどうすればよいか。
- この地域事業の発案に対して、住民はどんな反応を示したか。
- あなた自身の地域社会が抱える課題から重要なもの一つを選び、その解決方法を考える。

C. 活動内容

日本での課題別視察

施設：特定非営利活動法人 開発教育協会 (DEAR)

活動：貿易ゲームワークショップ**視察から学んだこと**

DEARは、開発教育の推進を目的に、地域レベルや国レベルで会員とともに活動するネットワーク型の組織である。開発教育に関する日本で最初のシンポジウムは、ユニセフと国連大学の後援を受けて1979年に東京で開催された。（DEARパンフレットより）

DEARの政策提言が目指すものは、すべての人により良い教育を届けることであり、開発教育に関する様々な研究も行ってきた。また、日本国内や世界各国の教育機関をつなぐ役割も担っている。

PYは、AからFの国に分かれて、世界貿易ゲームを体験した。各国には、紙、鉛筆、コンパス、はさみなどの道具や資源が配られたが、その内容には差があり、一部の国にはほかの国が持っていない道具や資源も与えられた。その後、各国は国内でのメンバーの役割を設定した。首相、外務大臣、情報大臣、市民、などである。各国は、自国の利益を最大にすべくほかの国々と貿易をすよう指示された。

20分間のゲームの終了時には、もっとも多くの資源を持っていた国が元々の資源を利用してさらに資源を増やし、最大の利益を上げて優勝した。

この貿易ゲームでの主な学びは、世界にはほかの国々と比較してずば抜けて裕福な国々が有るということである。PYは、資源のある国はそれを使ってより豊かになり、資源の少ない国はさらに貧しくなると感じた。経済力のある国からの援助が、国を発展させ改善するために重要であることも学んだ。

施設：国際機関 日本ASEANセンター**活動：講義及びディスカッション****視察から学んだこと**

日本ASEANセンターは、1981年5月25日に設立され、過去25年間はASEAN域内における貿易と投資の促進を活動の中心に据えている。同センターの組織は、理事会、執行委員会、事務局からなり、日本とASEANとの間の貿易関係を支援し強化する役割を担っている。

訪問中の一つのアクティビティでは、貿易（グループ1）、投資（グループ2）、観光業（グループ3）の3つのグループに分かれて活動した。

ディスカッションでは、ASEAN経済共同体2015の目指すもの、そのもたらす影響と効果について話し合った。投資分野では、主にASEAN数か国の社会基盤設備に関して話し合い、それらの国々がよく整った設備を持っていることが分かった。観光業分野では、増加している低価格航空会社の参入が人々の移動を容易にし、外国への旅行をしやすくしている点について話し合った。

グループ・ディスカッションI**ねらい**

- ディスカッション活動における期待を、ファシリテーターに対してとPYに対してそれぞれ設定した。
- ASEANと日本の関係の歴史を学んだ後、その関係について話し合った。また、ASEAN経済共同体について話し合った。
- ASEANと日本の長年の関係を象徴的に表す図を作った。

活動

- ASEANと日本の関係の歴史：ASEANの設立と、日本との関係に関する映像資料を見た。この資料では、両者の関係の草創期について解説されているほか、今後への期待も語られている。
- 各国から持ち寄った物を見せ合いながら、ファシリテーターとPYそれぞれへの期待や望むことを確認した。

成果

ディスカッション活動の初めに、各自が自国から持ってきた物を皆に見せつつ自己紹介をした。このアクティビティをさらに興味深いものにするために、持参したものを紹介しながら、自分にとって忘れることのできない経験についても話した。

PYは、DG6参加青年全体としてファシリテーターやディスカッション活動自体に期待することをまとめた。

ディスカッション活動そのものに望むこととしては、以下のようなものが挙げられた。

- ほかのメンバーの発言には否定的な反応をしない。
- 固定観念に囚われない。
- 開かれた心を保ち、息の長い友情を培う。
- 実際に即したディスカッションや、実例を用いたケーススタディ、交渉術トレーニングなど。

PYの互いへの期待や望むこととしては、以下のようなものが挙げられた。

- お互いの国のことをより深く理解する。
- 文化的理解を進める（多様性を保った調和）。
- 事業後に、実質的な協力やプロジェクトを行う。

ファシリテーターへの期待と望むことは以下のとおり。

- PYを巻き込んだディスカッション
- PYの積極的な参加と協力を引き出すこと
- 常に丁寧にセッションを準備すること

PYは、ASEANと日本の関係を、ASEAN創設時からさかのぼってディスカッションした。ASEANと日本の関係は、ASEAN加盟国すべてをまとめる上でも重要な役割を果たしているとの考えが示された。また、その関係はそれぞれの経済にも貢献し、さらに地域の長期的な平和を作ることに役立っている。

各分野における日・ASEAN友好協力の主な貢献：

<社会 政治面>

平和と安全、日・ASEAN友好協力における政治的安定、21世紀東アジア青少年大交流計画（JENESYS）や「東南アジア青年の船」事業などの社会文化的交流

<環境面>

京都議定書、防災、森林保護、持続可能性関連など

<エコツーリズム>

文化遺産の保護、及び自然災害への予防対策

<教育>

教育面での向上に関しては、支援団体としてJICAの名前が挙げられた。JICAは、ASEAN各国に対して、技術研修や職業訓練を提供している。

グループ・ディスカッションII

ねらい

参加青年は、

- グローバル化の影響についてさらに学ぶ。
- グローバル化が日本とASEANの関係に与える影響を学ぶ。
- より個人的なレベルで感じるグローバル化の影響をお互いに紹介し合う。

活動

- セッション外活動：グローバル化をテーマにしたドキュメンタリー「幸せの経済学」を見る。PYは、別途定める日にこのドキュメンタリーを見て、そこから得た学びを共有する。
- グローバルマインドに関するビデオを見る：グローバル化のこれからと、世界への影響。グローバルマインドについて話し合う。重要性の高い次の5つの切り口から、それぞれがグローバル化について思うことを話し合う：1)技術革新、2)文化、3)経済、4)社会、5)生活の質

成果

PYは、5つのグループに分かれてグローバル化の言葉の定義と影響について話し合った。近年、ほとんどの若い人たちはグローバル化の影響を感じている。PYはグローバル化を、世界中の人々がつながること、さらに技術や文化、人種の世界的な出会いだと感じている。PYは、技術の進歩に伴って世界が小さくなってきていると感じている。一方で、グローバル化が進むことで、以下のような面でも影響が見られる：

- 若者による外部文化の受け入れとアイデンティティの喪失
- 一部の国における頭脳流出と労働者の低賃金化
- 輸入品が国産品よりも安価になってしまう。外国が価格優位に立つ。

フィリピンでの課題別視察

施設：JICA技術教育モデル校支援プロジェクト（RESPSCI）

活動：講義及び実習

視察から学んだこと

フィリピン教育省は、「the K to 12 program」（幼稚園から高校生まで）事業を開始すべく準備している。この事業は、フィリピンの教育システムを国際的な標準である12年に延ばすことを目指すと同時に、教育現場から労働の場へのスムーズな移行にも資することになっている。

技術教育・職業訓練のモデル作りを進めるため、日本の独立行政法人国際協力機構（JICA）は、2014年4月にいくつかの技術職業訓練高校で高校レベルのモデル事業への支援を開始した。

このプロジェクトはRESPSCIと呼ばれ、飲食業コース、家政コース、コーヒー作りコースがあり、これらのコースで学ぶことによって、生徒たちは高校卒業までに職業技術を身に付けることができる。

視察はとてよく準備された内容になっており、生徒たちによる発表の後、家政クラスとバーテンダークラスの内容を体験する実習があった。PYは、生徒からカクテルの作り方や家事の方法を教えてもらった。PYからは、生徒たちに贈り物を渡した。

グループ・ディスカッションIII

ねらい

PYは、

- 日本と東南アジアにおける青年層の役割について学ぶ。
- 日本と東南アジアの青年たちが直面する様々な課題について話し合う。

活動

- 各国の開発における青年層の参加状況、及び青年の直面する課題について、国ごとに発表
- フィリピンでの課題別視察の振り返り

成果

各国の青年たちが直面する課題についての話し合いは、大変興味深いものとなった。現代の青年層の直面する様々な課題を知り、目を開かせる大変よい機会となった。以下が、各国で青年たちの直面する課題の要約である。

<日本>

日本参加青年は、日本の若者たちの働く意欲の低さが大きな問題として挙げた。これは、若者たちの自信の無さからくるもので、自分はしっかりとした社会人にはなれないとか、ほかの人に比べて自分は劣っている、仕事をするための技術が身に付いていないと感じていることが原因である。労働へのやる気の無さは、世の中には優

秀な学生がたくさんいて、争ってでも雇用されようという競争心の欠如から来ている。

日本参加青年は、高齢化の問題も挙げた。高齢者介護などの国の事業の経費を賄うため、若年層はこれまで以上の税金を納めなくてはならなくなるからである。

<シンガポール>

シンガポールPYは、若者の抱えるストレスの問題が挙げた。学校で良い成績を取ることが、家族からも社会からも求められていることが背景にある。シンガポールの物価が高いことから、若者たちには家族や自分自身の生活のためにより多くの収入を得るようにプレッシャーがかかっているという点も挙げた。

<インドネシア>

インドネシアPYは、十分な教育を受けられない若者たちの存在が、青年層の成功を妨げる原因となっていることが指摘した。現在インドネシア政府は、小学校から中学校までの9年間に関して、奨学金などの資金援助をしている。麻薬の使用とHIV/AIDSは、近年拡大している問題である。

<カンボジア>

カンボジアでは、交通事故が若者の死亡原因の大きなものとなっており、4090件の傷害と1229件の死亡が報告されている。若者の海外への移民と教育の不足も直面する課題として挙げられた。

<ブルネイ>

ブルネイPYからは、失業率の上昇が問題点として挙げられた。就労機会創出のための現在の施策は、効果を生み出しておらず、ほとんどの青年たちは学校を卒業すると、ほかの大勢と同じく政府系の仕事に就く。離婚も若者の直面する大きな問題となっている。政府の対策にもかかわらず、数字は上昇している。収入の上昇に伴って起こっている肥満の傾向もブルネイの若者の間で懸念すべき問題となっている。

<マレーシア>

マレーシアPYは、就労機会の不足から大学卒の若者たちの失業率が高くなっていることを指摘。また、マレーシアの多くの若者たちがクレジットカード利用の流行りにとらわれていることも報告された。カードを現金と同じようなものと思って使い、多くの若者が破産寸前になっている。

<ラオス>

ラオスでは、人身売買が社会問題となっており、若者たちに影を落としている。若い女性たちが違法な仲介業

者に引き込まれ、家政婦や性的奴隷として外国で働かされている。麻薬と、望まない妊娠モラオスの青年層が直面する大きな問題である。

<ベトナム>

Kポップへの傾倒の影響で、文化的なアイデンティティが低下していることが、ベトナムの若者の問題点として挙げられた。若者たちはまた、ハリウッド系などの西欧の映画を好み、その真似をしている。ソーシャルメディア依存は、依存症問題の一つとなっている。

<フィリピン>

フィリピンでは、現在も失業が青年層にとっての大きな問題である。若者たちの技術の不足や教育レベルの低さもその原因となっている。10代の妊娠は、それに次ぐ問題である。性教育、特に中学高校での教育の不足が、この問題の原因となっている。

<タイ>

タイにおける10代の妊娠は、東南アジアの中でも特に高い率となっている。発表者は、学校での性教育が効果的でないことを指摘した。若者の薬物依存も、近年大きくなっている問題として挙げられた。

<ミャンマー>

ミャンマーの教育システムは、ASEAN標準の年数と一致しておらず、大学を20歳で卒業することもあり得る。発表者は、この年齢ではまだ十分な能力を習得できておらず、職に就くには早すぎると考えている。就労機会の不足も、大学卒の若者の抱える大きな問題である。青年たちは政府に働きかけて、教育システムの改善や就労機会の創出などの行政的措置を求めている。

グループ・ディスカッションIV

ねらい

- 持続可能性というコンセプトを理解し、実現するための方法について話し合う
- コミュニティにおける強力な持続可能性デザインのもたらす影響を学ぶ

活動

- 小グループに分かれて、PYそれぞれの思う持続可能性というコンセプトと、そのための手法を紹介し合う。
- 私の理想のJASEAN：理想的な社会を作る。小グループ内で、理想的な社会に関する意見交換をし、その後ほかのグループの前で発表する。

成果

PYは、持続可能性とは何か、また持続可能な地域社会とは何かについて話し合うことができた。PYがただ

り着いた考えは、持続可能性は視点の長い目標であり、持続可能な地域社会を作るためには、経済発展だけでなく生活の質の向上や環境保護も必要であるということである。一方で、「地域社会の持続可能性」の達成は、その地域社会の経済的、環境的、また社会的な条件に大きく依存している。PYは、持続可能性はまだこれから先の目標だと感じた。ASEAN各国や日本は、それぞれの経済開発に注力しており、多くの国にとって、持続可能な開発への移行にはまだ時間がかかりそうである。

グループ・ディスカッションV

ねらい

- 事後活動に関連付けて、それぞれの国における地域開発事業について話し合う。
- 日本とASEANのつながりに関連する事業実施についての案を作る。
- 日本とASEANの青年ネットワークを構築する。
- 日本とASEANのつながりの重要性を周知する。

活動

- 様々な地域開発事業戦略についての国ごとの発表
- ASEAN青年ネットワークの構築に関するディスカッション。理想的なネットワークの姿や、プラットフォームの形を話し合う。
- PY全員が1日議員になるという設定でのワークをする。日本とASEAN地域全体に影響の有る法律や政策を作るという課題にそれぞれで取り組み、その後全員で共有し話し合う。

成果

地域開発というテーマは、日本とASEANの関係の中心的な位置を占めている。このテーマを通して我々はそれぞれの属す社会の生活の質の向上を目指している。各地域社会の目指すのは、そこに住む人たちの生活を向上させることである。同時に、我々は地域開発が日本とASEANという大きな枠組みの中でどのように重要な位置を占めているのかも理解しなければならない。

PYは国ごとに、それぞれが果たしている社会貢献についてグループ全員の前で発表した。各国の発表からの学びをそれぞれの地域で応用し、自分の地域に貢献することがねらいである。

<日本>

北海道むかわ町の「田んぼdeミュージカル」事業では、年配者が自らの生活を映し出す映画作りを学び、農業者が自ら演者となって映画を撮っている。これらの事業では、各自の自信レベルの向上が確認されている。日本中に広まると良い事業である。

<フィリピン>

Kallaysaという団体は、地域の青年リーダーたちに

よって組織されており、6つの村と4つの学校の復興を支援している。

<ベトナム>

子どもに焦点をあてた防災と気候変動に対応するためのプロジェクトで、これはベトナムの災害にあいやすい地域の家庭が災害時の備えができるようにしている。

<ラオス>

青年リーダーたちによって立ち上げられた水くみ上げ浄化プログラムは、村々の家庭が安全な飲料水を確保することに貢献している。

<ミャンマー>

ミャンマーの例は、学校に通っていない孤児たちを対象とした事業。ボランティアの市民が先生になり、バスで市内を回って子供たちに教える移動学校を紹介。

<マレーシア>

大学生がグループを作り、クアラルンプールの孤児たちを助ける活動をしている。大学とも提携して、孤児たちの教育にかかる経費や日常の必要なものを提供している。

<ブルネイ>

紹介されたKenali Negara Kitaniという団体は、国内の観光を推進すると同時に、観光についての人々の意識の向上に努めている。海外からの観光客はホームステイを通して、ブルネイの人々のもてなしの文化を体験することができる。

<カンボジア>

We Are One財団は、「文化に貢献する若者たち」というテーマの下で芸術と文化を中心とした教育的イベントを開催する団体。文化や伝統、文学、文化的遺産についての意識の向上を目指している。

<インドネシア>

Indonesia Mengajarは、持続可能なプロジェクトを青年教師の参加の下で作り出す地域活動をしている。ボランティア教師を募り、インドネシア全国の村々で地元の公立学校で教えている。この団体はまた、インドネシアの貧しい地域の状況を理解している将来のリーダーたちのネットワーク作りもしている。

<タイ>

[Meu] ngYenは環境団体で、チェンマイ市で毎年5000本の植林をすることを目標に活動している。

<シンガポール>

パーキングデー（PARK(ING) DAY）運動は、都会のスペースを芸術的で創造的な場所にし、新しいことを試す場、社会活動の場にする運動である。人々がお互いを信頼することを学び、しっかりと活動に参加し、慈善団体への寄付や市民グループへの参加のような支え合いの活動にかかわるようになると、そこに共有される価値観が生まれる。

ここまでの、本DGでの主な学びの内容である。国際関係に含まれるのは、政治や政府や外国との関係のことだけでない。それは、教養があって自らの力に気付いている市民から成る地域社会を作っていくことであり、その中で我々は皆、ほかの人たちに手を差し伸べ、より良い日本ASEANコミュニティを作っていくことができるのである。

D. 決意・期待される今後の活動

DG6では、文化交流や教育にソーシャルメディアを活用することを事業後の活動とすることにした。

<JASEANの多様な顔（Fifty Shades of JASEAN）>

これは、伝統的な踊りや歌、言葉などの紹介を通して、文化の価値を認識すること及び日本とASEAN各国間の相互理解を促進することを目指すビデオプロジェクトのタイトルである。事業期間中に、にっぽん丸の船上で作成する。事業終了後にYoutube上で公開し、さらに各国のフェイスブックページでも共有する。事後活動組織や各種団体が本事業を紹介する際にも用いることができる。このプロジェクトへの反応が良ければ、さらにビデオを作成し、事業の持つ国際的なつながりの中で協力して活用する。

<II = I>

日本ASEAN関係の社会的文化的基盤をさらに強くすることを目指して、DG6では各国代表団の事後活動に、本グループでの学びに関連する様々な活動を取り入れ、日本ASEAN地域のつながりについての人々の意識の向上を進める。長期的には、DG6としてこの地域の共同体的組織の創設に貢献したいと考えている。加盟する者の間の深い関係を基盤とし、共有するアイデンティティを持つことで、メンバーの間での紛争の予防に役立つだろう。

E. 評価・反省（自己評価セッション）

ディスカッション活動は、本事業の一つの柱であり、この活動を通して、青年たちは様々な考えを出し合い、お互いから学び、ずっと続く友情を培うことができた。国際関係は、PYが普段このテーマに親しんでいるかど

うかにかかわらず、お互いからの学びを通して、今後の国際関係をよりスムーズに進めることに貢献する重要なテーマである。

評価セッションでは、このテーマについてさらに多くの学びを得ることができた。PYに特に人気だったのは、日本とASEANの関係を過去、現在、未来に渡って紹介した発表である。また、持続可能性とグローバリゼーションは、日本ASEAN地域に大きな影響を与えていることとしてPYの興味を強く引くことになった。さらに、地域開発というテーマもPYに人気があった。このテーマは、日本ASEAN関係の中心にあるもので、そこでは人々が互いに助け合い学び合っている。

F. ファシリテーター所感

初めに、今回このグループのファシリテーターの役を賜りましたことに対し、日本政府にお礼申し上げる。またフィリピン国家青少年委員会と、フィリピンの事後活動組織にも、今回再びファシリテーターになる機会を与えて下さったことに心から感謝する。最後に、様々なアイデアを共有し分野の違いを超えて互いに学び合うことのできたファシリテーターチームのすべてのメンバーと、ディスカッション活動がスムーズに進むようすべての場面で手を差し伸べて下さった管理部の皆様にも感謝する。皆様、本当にありがとう。

私のグループで多くを学び取ってくれたDG6の全てのPYのことをとても誇りに思う。昨年8月の日本でのファシリテーター会議で私が提示したのは、国際関係の中心となるものという点と、これからの国際関係を改善していく方策という点だった。今回の活動を通して、今後連携していくことのできる様々なプログラムの存在に気付いた。

ディスカッション活動全体に関してだが、セッションVの後に行われる活動についても、ファシリテーターが事前に計画を立て、日本でのファシリテーター会議で発表することを提案したいと思う。事業ではセッションVの後に、関連する4つのセッションが行われるが、ファシリテーターとしては準備ができていなかった。プロジェクトマネジメント、振り返り、まとめ、評価という4つのセッションに関しても、資料や映像などの準備をしておけば、ディスカッションをさらに深めることができただろう。

全体として、事業はとても順調に進んだ。また、私個人としてもPYから多くを学ばせていただいた。今回のPYは、どの国もこれまで以上に発言力が有り、有能でやる気が高い人だった。PYの多くが、将来ファシリテーターになりたいと考えていることも分かった。彼ら彼女らの良い模範となれたことを願っている。ありがとう。



(7) 学校教育グループ

ファシリテーター: Mr. Low Chai Siong Anthony

PY: 41

A. 焦点、目的、ゴール

焦点

日本とASEAN各国における学校教育の現状を認識し、学校教育において地域社会・国際社会で活躍できる人材を育成するための取組について議論するとともに、そのために青年がどのように貢献できるのか議論し、実行可能な活動案を発表する。

目的

- PYはASEAN各国と日本の学校教育の現状を理解する。
- PYは「東南アジア青年の船」事業後に自国において、地域の学校と協力して取り組むことのできる人材育成の活動案を策定する。

ゴール

- PYは、地域社会・国際社会における人材育成の観点から、日本とASEAN各国の学校教育の類似点と相違点について広く理解する。
- PYは、学生が地域社会の発展について学ぶことができる場として、学校教育と地域社会のつながりの重要性を理解する。
- PYは国際社会における人材育成の重要性について学ぶ。
- PYは、地域社会で活躍できる人材を育成するための学校の取組に、青年がどのように貢献できるのか理解する。
- PYは、地域社会で活躍できる人材を育成するための学校教育における取組に、青年が貢献するよう促進する方法について理解する。

B. 事前課題

個人課題

- 各自、グループ・ディスカッションVまでに、初等学校、中等教育学校、カレッジなどで撮影した自分の学生時代の写真を一枚用意すること。その写真が

ら学校の活動（スポーツ、青少年団体、クラブ活動など）や、今日の自分に導くために良い影響を与えてくれた人物（教師、講師、インストラクターなど）について振り返ること。

- 自国で実施した自身の社会貢献活動の事例と、社会貢献活動が重要である理由を説明すること。個人課題bはグループ・ディスカッションIVで議論する。
- 地域社会で活躍できる人材を育成するための学校の取組に、青年がどのように貢献できるのか説明すること。特に自国の地元青年が、そのような取組に貢献するため参加できる活動について調べてもよい。個人課題cはグループ・ディスカッションIIで議論する。

国別課題

グループ・ディスカッションIの目的を達成し、ディスカッション・テーマの理解を深めるため、参加国ごとに自国の教育現状について話し合い、発表すること。

PYは国ごとに分かれ、自国の教育制度について調査すること。プリスクールから、初等学校、中等教育学校（高等学校）、短期大学/シニアハイスクール/ポリテクニク、大学までの教育の進路について話し合ってもよい。国ごとに調査した内容についてパワーポイントのスライドを使った5分間のプレゼンテーションを用意すること。DGメンバーへの発表はグループ・ディスカッションIで行う。

研究課題

- あなたの国の現在の教育進路はどのようになっていますか。
- あなたの国の教育について改善が必要と思われる分野はありますか。
- あなたの国では学校教育でどのように人材育成に取り組んでいますか。

- 学校教育支援のための政府による資金提供はありますか。

C. 活動内容

日本での課題別視察

施設：品川女子学院

活動

- 品川女子学院校長の漆紫穂子氏から学院の沿革、教育目標、カリキュラムについての概要説明を受けた。
- 音楽、体育、社会、理科の授業を見学した。
- PYは国ごとに分かれ、ホームルームの時間に生徒に自国について簡単な紹介をした。
- PYは昼食とホームルームの時間に生徒と交流した。
- PYは茶道部の活動を見学した。

視察から学んだこと

- 品川女子学院は女性の社会進出に重点を置き、社会に貢献する女性を育成するためのカリキュラムを組んでいる。
- 学院は2030年までに男女雇用機会均等法が徹底されるよう女性教育に力を入れている。PYは教育によって女性の社会的地位を向上できることを理解した。
- PYは、学院が掲げる目的を達成するため実施している4つの主なプログラムについて学んだ。
 - 起業体験プログラム
企業のインターンシップ
新商品開発
 - ITリテラシー
EvernoteのCEOによる講義
 - 海外への修学旅行
Expanding Horizonプログラム
海外の学校との提携
 - 社会事業プログラム
カンボジアに小学校を建設
- 品川女子学院は教育改革のとても良い事例である。PYは自国の教育制度と比較することができ、人材育成の促進のため学院が実施しているいくつかのプログラムを自国でも実施したいとした。

グループ・ディスカッションI

ねらい

地域社会・国際社会で活躍できる人材を育成するため、日本とASEAN各国の学校教育制度の類似点と相違点を理解する。

活動

自国の教育進路について共有した。

成果

- PYは学校教育の観点から、ASEAN各国と日本の類似点と相違点について学んだ。

- すべての国の教育制度において、人材の育成が共通のゴールの一つである。
- 共通の課題として、学生への就労支援、遠隔地の教育、政策の影響、教育の分布と質、成績重視などが挙げられた。
- すべての国において政府が巨額な予算を教育に投じ、世界で活躍できる卒業生を生み出す努力をしているとした。
- 概して、ほとんどの国で大学進学前に、類似した12年間の教育課程を設けている。
- 学齢児童に対する初等教育がすべての国で義務化されている。
- 技能・職業訓練もすべての国で提供されている。

グループ・ディスカッションII

ねらい

学生が地域社会の発展について学ぶことができる場として、学校教育と地域社会のつながりの重要性を理解する。

活動

- 制服を着用してグループ・ディスカッションIIに参加した。
- 前回のグループ・ディスカッションを振り返りを行った。
- 小グループに分かれ、自分にとって学校教育とは何かを議論し、発表した。
- 社会貢献の影響力についてのビデオを鑑賞した後、青年が社会に貢献できる方法について議論し、発表した。

成果

- 自分たちが受けてきた教育に感謝した。
- その教育制度において改善が必要な分野を振り返り、以下の様な意見が挙がった。
 - 批判的思考、問題解決、創造性
 - 将来、キャリアを築くために必要となる技術スキルとワークスキル
- 教育は、道徳的価値観、他者への思いやり、寛大さ、配慮といった感性も育てる。
- 教育はまた、青年の国民性を育み、一個人を超えて青年が地域社会とつながることを可能にする。
- 概して、学校教育が青年の育成と地域社会を超えた社会問題について知るためのプラットフォームとして必要であることに合意した。
- 青年は、ボランティア活動、募金活動、ソーシャルメディア・マーケティング、NGOや他組織プロジェクトへの参加など、様々な方法で社会に貢献ができる。
- 地域社会で青年が実行できるプロジェクトとして、同級生への学習サポート、植林、環境美化、高齢者や恵まれない人たちへの訪問、献血などの意見が挙

がった。

- h. 学校教育は、世界で活躍できる市民を生み出すため、地域社会の利害関係者を巻き込んだ複雑な過程である。
- i. 学校教育と地域開発は連携すべきである。

フィリピンでの課題別視察

施設：ドン・ボスコ青少年センター（Tondo Inc.）

活動

- a. センターの沿革、目標、取組、コースについて、説明を受けた。
- b. 学生によるセンター見学ツアーが行われた。
- c. 食品飲料学部の学生が準備した昼食がふるまわれた。

視察から学んだこと

- a. ドン・ボスコ青少年センターは、社会から見捨てられ取り残された学生が、将来的に有給雇用を得られ、貧困が緩和されるよう、彼らに教育の機会を提供している。
- b. センターはフィリピン国内外の企業において、学生がインターンシップや雇用の機会を得られるよう支援も行っている。
- c. センターは技術スキルだけでなく、人生における価値観や心構えについても宗教上の教えなどを通して学生に教えている。
- d. PYは学生たちの友好的で規律正しい姿勢に感銘を受けた。
- e. 教師や講師のほとんどはセンターに貢献したいと思っていた元学生である。そのため現学生と似た経歴を持っており、学生とよく交流し、良い関係を保っていた。

グループ・ディスカッション III

ねらい

国際社会における人材育成の重要性について理解する。

活動

- a. フィリピンでの課題別視察で学んだことの振り返りを行った。
- b. 自分たちにとっての国際社会とは何かを議論した。
- c. ファシリテーターから、いかに既参加青年、管理部長、にっぽん丸乗組員が2013年にシンガポールに寄港した際、台風ハイヤンの被災者を支援したかについて共有。支援物資はシンガポールからにっぽん丸で運ばれ、台風ハイヤンのフィリピンの被災地に届けられた。
- d. 国際社会において、青年がどのように人材育成に取り組み、積極的な役割を担うことができるかについて議論した。
- e. ファシリテーターから、自分や家族、地域、企業、社会の生活の質を向上させてくれる貢献能力を高めることで人々に活力を与えられるとした、国連によ

る「人材育成」の定義を説明した。

成果

- a. 相互尊重と理解、多様性にかかわらずつながる世界など、国際社会のいくつかの特性について同意した。
- b. 国際社会で活躍できる人材を育成する方法について検討した。
 - 自己開発（自分自身が向上でき、ひいては地域社会に貢献できる双方にプラスになる状況）
 - 英語の使用による国境を越えたコミュニケーションの向上
 - 青年間のネットワークとコミュニティの形成
 - 国際的なプログラムの中でのボランティア活動
- c. 青年が国際社会において積極的な役割を担う上で障害となるものについて検討した。
 - 食物、住居、家計など、基本的なニーズ
 - 青年の国際的な活動への参加を妨げる社会規範
 - 地域社会や関係当局からのプログラムへの支援不足
- d. PYは小規模なプロジェクトから開始することがより実行可能であるという点で合意したが、プロジェクトが持続可能であるかについても検討すべきとした。

グループ・ディスカッション IV

ねらい

地域社会で活躍できる人材を育成するための学校の取組に、青年がどのように貢献できるのか理解する。

活動

各PYは自国において地域社会で活躍できる人材を育成するために実施した、自身の社会貢献活動を共有した。

成果

- a. ASEAN各国と日本で実施された社会貢献活動について学んだ。
- b. 地域社会が直面している状況を共有し、その上で青年が立ち上げられる活動案を検討した。
- c. 資金の限度など、青年がプロジェクトを立ち上げる際に直面するプロセスや障害についても共有した。
- d. 学校教育と連携した実行可能な社会活動案を策定することができた。
- e. 新たな活動を始めるのではなく、既存の社会活動に積極的に参加し、また、「相乗効果」を生み出すために同級生や家族にも社会貢献活動への参加を促進することが必要であると気付いた。

グループ・ディスカッション V

ねらい

地域社会で活躍できる人材を育成するための学校教育における取組に、青年が貢献するよう促進する方法について理解する。

活動

- a. 小グループに分かれ、今日の自分を形作る上で重要だった学校の活動や人物について、学生時代の写真を見ながら話し合った。自分の人格を高めてくれた指導者について振り返ったPYもいた。
- b. ロールプレイを通じて、青年を奨励する最善の実践例について議論した。地域社会において地元青年の社会貢献活動への参加を促進するため、ロールプレイでは実用的なシナリオがPYに与えられた。
- c. ファシリテーターは、いかに高等学校の教師が人生で成功するために努力するよう自分を感化してくれたかを共有した。また、PYが青年のリーダーとして、前向きな主張をすることで学生を奨励していくべきだと語った。

成果

- a. スポーツチームへの参加、学生組織への参加、群衆の前でのパフォーマンスなど、自らの人生の転機となった経験について共有した。
- b. 同級生の学習サポート、友人の参加、ロールモデルの存在、指導者による導き、参加することの意義、周りが青年の成功を信じることなど、青年を奨励する様々な方法を学んだ。
- c. ロールプレイを行うことで、青年の社会貢献活動への参加を促進する際に障害となり得るものについて明確にすることができた。障害となり得るものとして、青年の態度、家族からの支援不足、生活の中の優先事項の違いなどが挙げられた。しかしながら、青年のリーダーは前向きな姿勢を保ち、地元青年を社会貢献活動に参加させるよう様々な方法を試みるべきである。
- d. PYは人によりやる気を起こす理由が違うことを理解した。貢献したいという気持ちは、過去の経験や他の内在的要因による可能性がある。
- e. 青年は積極的に社会貢献活動に参加し、他者の生活に変化をもたらすことで、更なる高みを目指すよう努力すべきである。

D. 決意・期待される今後の活動

PYはASEAN各国と日本における学校教育の重要性を認識した。また、社会貢献活動案についてブレインストーミングを行い、自国に帰った後に実行可能なプロジェクトを提案した。

社会貢献活動の例

- a. 遠隔地の学童のための移動図書館の設置
- b. 学童のための無料英語クラスの実施
- c. 地域社会の緑化推進
- d. 恵まれない家庭児童への学費免除による援助
- e. 命を救うため、青年への献血推進運動を毎年実施する

PYはファシリテーターの講義を通して、プロジェクトマネジメントの基本的な知識を学んだ。また、ファシリテーターが行ったワークショップで、評価・計画・実行・モニタリング評価の各プロセスについて学び、プロジェクトマネジメントについて理解を深める機会を与えられた。

PYはプロジェクトマネジメントの理解が深まったことにより、自国に帰った後に地域での社会貢献活動を実施したいという気持ちが高まった。

E. 評価・反省（自己評価セッション）

PYは自国での社会貢献活動に向けたグループ・ディスカッション活動中に、彼らが学んだことを適用するアクションとして「Hand Clapper Promise」を採用した。

評価については以下のとおり。

- a. 日本とASEAN各国の教育制度について学ぶことができた。また、各国の教育制度の類似点と相違点、長所と短所について議論し、共有する機会が持てた。
- b. 学生が地域社会の発展について学ぶことができる場として、学校教育と地域社会のつながりの重要性について理解できた。
- c. 国際社会における人材育成の重要性について学ぶことができた。
- d. 地域社会で活躍できる人材を育成するための学校の取組に、青年がどのように貢献できるのか理解することができた。
- e. 地域社会で活躍できる人材を育成するための学校教育における取組に、青年が貢献するよう促進できた。
- f. 課題別視察を通じ、学校と地域社会とのつながりにについても学んだ。
- g. 各国で実施された様々な社会貢献活動についての議論を通じて、PYは互いに独創的な案を学び、それらの案を適用する方法を学んだ。
- h. 議論が進むにつれて社会貢献活動への関心が高まり、自国に帰った後に貢献しようとする気持ちが高まった。
- i. ディスカッション活動に積極的に参加し、ディスカッション活動が有益な学びの方法の一つであることを認識した。
- j. 社会貢献活動に学生を参加させる利点について認識できた。今後PYが自国の学生のために社会と連携した活動を開始する際、ここで学んだことを役立てることができる。
- k. PYはファシリテーターの講義を通じ、プロジェクトマネジメントのスキルを学ぶことができた。
- l. PYは「Hand Clapper Promise」のドキュメンタリービデオを作成した。ビデオにはPY自身の記録として

ディスカッション活動で学んできた様子や、「Hand Clapper伝説」の記録として自国での有益な社会貢献活動に向けた準備の様子が収められている。

F. ファシリテーター所感

まず初めに日本の内閣府に対し、第42回「東南アジア青年の船」事業において、学校教育グループのディスカッション・ファシリテーターとして務める機会を与えていただいたことに心からお礼を申し上げたい。また、SSEAYPインターナショナル・シンガポール(SIS)にも、このような責任ある役目を果たすことに信頼をいただき感謝を申し上げたい。

ファシリテーター会議

ファシリテーターであることはまた、第42回「東南アジア青年の船」事業のディスカッション活動を成功させるために力を合わせる、献身的なチームの一員であることを意味する。ファシリテーターと内閣府との関係は、会議以前の早い時期からメールや電話を通じて築かれてきた。しかしながら、東京でのファシリテーター会議は、ファシリテーターが準備した各DGの計画と目標が、ディスカッション活動の焦点と目的にきちんとすり合わせてできているか確認する上で極めて重要であった。

事前課題

にっぽん丸船上でのディスカッションの時間は限られているため、PYには事例や参考文献などをあらかじめ調べ、必要な予備知識を身に付けてくることが期待された。事前準備をすることはPYがディスカッション活動に積極的に参加する上で大いに役立つ。それゆえ、PYが出航前に個人課題や国別課題を終えておくことは不可欠である。

国別課題は各国の別々の地域に住んでいるPYが互いに協力しなければならないため、出航前までに完成させるには困難が予想された。したがって、私は各国のナショナル・リーダーと密に協力し、PYが国別課題と個人課題を完成できるよう務めた。

PYは事前課題に個々の意見をよく取り入れて用意することができた。彼らが出航前研修で忙しかったにもかかわらず、個人課題と国別課題の提出率が100%であったことを私は嬉しく思う。

日本・ASEANユースリーダーズサミット (YLS)

東京で開催されたYLSでの「共生社会」に関するディスカッションは、にっぽん丸船上でのディスカッションについてPYを啓発する良いスタートとなった。私は東京に向かう前から、YLS実行委員会のコーディネーターと彼女のチームと密に協力した。私たちはローカルユース(LY)とPYが学びの経験を充実させるために意見を

交わした。コーディネーターと彼女のチームは各ディスカッション活動の目標を達成できるよう、素晴らしい仕事をしてくれた。YLS開催中にアドバイザーを務めたことで、私はディスカッションの本質的な価値とディスカッション参加者への影響力について考えを深めることができた。

LYとPYは円滑に議論を進め、意見を交わしていた。言葉の壁やコミュニケーション・ギャップもなく、なんとか意図を伝えていた。ディスカッション活動中、LYとPYは議論に積極的に参加し、「共生社会」について互いの考えを共有した。また、ディスカッションの内容をまとめたプレゼンテーションの発表に向けて密接に協力し合う際、彼らの間にはチームワークが生まれた。

グループ・ディスカッション活動

ディスカッション活動を遂行するため、以下の方法論を採用した。

- グループ・ディスカッション
- ロールプレイ
- 問題ベースの学習
- 経験の共有
- ビデオ

各グループ・ディスカッションのプロセスは順調に進み、目的は達成された。当初から、学校教育をテーマとした本DGのディスカッション計画を立てる上での課題の一つに、全PYの学習ニーズに応じることがあった。PYは、教育関係者、講師、トレーナー、大学卒業後に教師を目指す学生など様々な経歴を持っているため、PYがディスカッション活動の目的を果たし、ゴールを達成するため、私は各ディスカッション活動が開始される前に学校教育に関する各ディスカッション・トピックの焦点を調整した。

グループ・ディスカッションIIで、私はPYに学校の制服を着用してくるよう要求した。また、貧しい家庭の児童の人生が学校教育によりどう変わったかという内容のビデオを鑑賞させた。自国で適切な教育を受けられることが幸福であることを、私はPYと共有した。しかし、すべての人々が適切な教育を受けられる幸福な環境にいる訳ではない。私はPYに制服を着用させることで、適切な教育を自分たちが受けてきたと認識させ、学校教育を受ける機会に恵まれない人々を支援するための社会貢献活動を自国で企画するよう要求した。PYの多くはビデオを見た後涙を流し、自国の状況を改善することを約束した。

本事業が始まる前、PYはディスカッション活動中に英語を使用することを懸念していた。快適な場所から一歩踏み出し、英語を使用することを恐れないよう、私はPYを後押しした。例えばグループ・ディスカッションIVでは、地元で行った自身の社会貢献活動の経験につい

て、すべてのPYに3分間ずつ発表する時間を与えた。これによりPYは英語を使用して自分の経験を共有し、人前で話すことで自信をつけることができた。

PYは学生時代の学校の活動や、自分のモチベーションを高めてくれた人物を思い出させる写真を持参するよう求められたことに驚いていた。学校環境におけるモチベーションの重要性を、私はPYに認識させたかった。青年の社会貢献活動への参加を促進する実例をシミュレーションするため、ロールプレイを実施した。地域社会において地元青年の社会貢献活動への参加を促進するため、ロールプレイでは実用的なシナリオが与えられた。

運営委員会

私はDG7から5名のPY（DG代表として2名、各国代表として3名）が、ディスカッション活動運営委員会に参加できたことを嬉しく思う。彼らには私の手伝いだけでなく、グループ・ディスカッション活動の先導・管理もしてもらった。これにより彼らの自信と能力を高める機会を与えることができた。彼らはディスカッション活動運営委員会の一員として、DG7の他のPYの全面的協力を得て、効率的かつ効果的に導入プログラムと成果報



告会を準備することができた。ディスカッション活動運営委員会のメンバーは、ファシリテーターがディスカッション活動を進める手助けをし、ファシリテーター下船後は事後活動セッションを促進していくなど、ファシリテーターとPYとの架け橋として重要な役割を果たしてくれた。

終わりに

2011年にPYになったことは私の人生観を変えてくれた。そして、今年度ファシリテーターになったことは、地域社会・国際社会で活躍できる人材を育成するための地域の学校の取組に、青年が協力していけるよう私自身も更なる努力をする後押しをしてくれた。私たちDG7には「Are you excited? Take out your clapper and clap!（ワクワクしていますか？あなたのClapperを取り出して、カタカタと鳴らして！）」というキャッチフレーズがあった。私はPYがこれからも地域における社会貢献活動に参加し、Hand Clapper Promiseを心に掲げ、地域社会の構築に積極的に関わっていくことを確信している。これが私たちDG7、学校教育グループのHand Clapper伝説！



(8) 情報とメディア

ファシリテーター：Ms. Devianti Febriani Faridz

PY：38

A. 焦点、目的、ゴール

焦点

現代のメディアと情報の社会的影響力を認識し、日本とASEAN各国において、人々が情報を発信するためにいかにメディアを主体的、かつ効果的に活用できるか、また、メディアからの情報の取捨選択ができるかについて議論し、その上で、実行可能な活動案を発表する。

目的

- a. PYは変化を続ける今日のメディアについて、また、そのメディアの変化が社会にどう影響するかについて知識を深める。

- b. PYは社会問題・環境問題に対する実行可能で効果的なメディアキャンペーンを設計するノウハウを得る。

ゴール

- a. 地元の人気メディアの魅力は何かを分析し、ASEAN各国と日本におけるメディア・ランドスケープの相違点と類似点について認識を深める。
- b. PYはメディア・バイアスやメディア・スピンを識別できるよう、メディア・リテラシーを理解し、批判的に考える力を育成する。
- c. 政府、メディア、公共による情報発信のメディア・

- ツールを識別する。
- d. 様々な国における社会意識向上のためのメディア利用方法を比較する。
- e. 効果的なメディアキャンペーンを活用した事後活動の基盤を構築する。

B. 事前課題

個人課題I

興味深く、効果的であると感じた印刷、ラジオ、テレビ、ネット上の広告例を一つ選び、画像、色、スタイル、タイポグラフィなどの広告要素を考察し、その広告メッセージの意図を分析すること。

個人課題II

ネットでのやらせ、ネットいじめ、検閲など、自国のメディア悪用事例を一つ選び、それが自分の住む社会に与える影響について分析すること。その事例に関する記事を持参すること。

個人課題III

ディスカッション活動に向け、以下の項目について各自調査すること。

- 各国のメディアの発達
- ICT（情報通信技術）の浸透
- 政府、NGO、地域社会がICTの浸透を促進する方法
- 地元で作成されたバイラル動画の社会への影響
- 政府、メディア、公共・民間セクターが、様々なメディア形態を情報発信にどう利用しているのか分析する
- メディアに関する政府の規制

国別課題

以下の両トピックについてパワーポイントでプレゼンテーションを準備すること。

- a. トピック1：最も人気のある地元メディアについて5分間のプレゼンテーションを準備すること。
 - パート1：メディアの種類とタイプ
 - パート2：関連する写真、印刷・ネット上の記事、テレビ番組、ラジオ番組
 - パート3：視聴率や視聴者の数
 - パート4：人気の理由とプロモーション方法
 - パート5：番組への公共批判
- b. トピック2：自国において社会意識向上や社会運動促進のために、地元の人物、著名人、組織がソーシャルメディアをどう利用したかについて5分間のプレゼンテーションを準備すること。
 - パート1：プレゼンテーションのタイトルと参加国メンバーの名前
 - パート2：事例の背景
 - パート3：社会への影響

- パート4：それにより生じた社会運動や社会意識

船内グループ課題I

「Think Before You Click（よく考えてからクリックする）」コンテストのポスターを制作するため、雑誌、新聞、写真、カラーマーカーなどの材料を準備すること。乗船前に自国で材料を収集すること。接着剤、はさみ、セロハンテープ、鉛筆、消しゴムなどの物品は、管理部デスクで貸出が可能である。ポスターはダイニングルーム付近のホワイトボードに掲示される。

船内グループ課題II

船上での社会問題（例：火災予防、ホームステイでの食品の安全性、食物廃棄など）について1分30秒間の市民ジャーナリズム動画を制作するため、編集ソフト入りのノートパソコンや録画機能を備えたスマートフォンを準備すること。編集ソフト入りのノートパソコンは任意とする。

C. 活動内容

日本での課題別視察

施設：YouTube Space Tokyo

活動

- a. YouTube Space Asia Pacificオペレーション・コーディネーター杉塚崇氏によるプレゼンテーション
 - b. YouTube Space Tokyoの施設見学ツアー
- 視察から学んだこと

YouTube Spaceは、いわゆるクリエイターと呼ばれる、少なくとも5,000人以上のチャンネル登録者を持つYouTubeアカウント保有者が、最先端の設備を利用できる施設である。YouTube Spaceにはプロ仕様のカメラ、照明機器、グリーンルーム・スタジオ、編集ソフトなどが備えられている。世界に8つのYouTube Spaceがあり、YouTube Space Tokyoは3番目にできた施設である。

PYはプレゼンテーションの中で、YouTube SpaceがYouTubeユーザーやパートナーに独創的な動画の制作を促していることを学んだ。今までにYouTube Spaceの設備を利用したクリエイターは世界で何百人にも及ぶ。

PYはより多くのネット市民がYouTubeに情報や娯楽の源を求めていることを理解した。そのためプロ品質の動画を制作できる環境をクリエイターに提供する必要がある。

編集や映像制作に慣れていないクリエイターのために、YouTube Spaceは施設内で様々な無料の動画制作レッスンを提供している。クリエイターはYouTube Spaceの設備を無料で使用することができるだけでなく、クライアントとの会議やインタビューを行うため会議室も無料で使用することができる。

施設全体の見学とのことだったが、PYは予定されたセッションの中でクリエイターと話せる機会がなかったこと、また、動画制作の様子を見学できなかったことを残念がっていた。

これまでのところ、YouTube Space Tokyoは毎年15,000人の訪問者を迎え、今年の終わりまでには20,000人の訪問者を予想している。また2016年のバンコク進出など、他のアジア諸国への拡大も計画している。

グループ・ディスカッションI：人気メディアとメディア・ランドスケープ

ねらい

- ディスカッション活動のゴールを明確にする。
- 人気メディアが社会に与える影響を理解する。
- デジタル・デバイド（情報格差）について学ぶ。

活動

- 個人のゴールと懸念事項の確認
- 国別課題トピック1の発表を行った。視聴者数や視聴率が高く、流行を作る自国の地元人気メディアのタイプについて発表し、その魅力の理由について分析した。PYはテレビ、ラジオ、印刷、ネット上から1つ、メディアのタイプを選んだ。各発表の後には質疑応答が行われた。
- 小グループに分かれ、効果的な印刷、ラジオ、テレビの広告例を分析した個人課題Iについて議論した。また、議論を引き起こした度合いと社会にどう受け入れられたかという観点から、どの印刷広告が最も印象的かを小グループごとに議論した。
- 各国のメディアの発達についての共有
- 国際的なICT（情報通信技術）の浸透についての共有
- 政府、NGO、地域社会がICTの浸透を促進する方法の共有
- ネット上のバイラル動画の影響に対する一般の人々の認識について話し合った。
- 「Think Before You Click（よく考えてからクリックする）」ことをPYに促進するポスターを協力して制作した。DG8の担当者によって招集された国別ミーティング中に、最良ポスターへの投票が全参加国からのPYによって行われた。

成果

- ゴール設定の活動を通して、PYは共通のゴールと期待することを設定した。
- テレビ放送、ラジオ放送、印刷、ネット上への動画投稿において、どのような要素が視聴者を魅了し、高視聴者数の獲得に導くかについて理解を深めた。
- ASEAN各国と日本のメディア・ランドスケープについて学んだ。
- 印刷広告を分析し、魅力的な広告とそうでない広告

の違いについて議論し、広告のメッセージを解釈する能力を高めた。人により広告の解釈は異なった。感情が駆り立てられる広告が常に製品購入につながるわけではないことを理解した。

- 地域へのIT開発促進を政府が支援しているが、ほとんどのASEAN各国には情報格差が存在していることを理解した。

グループ・ディスカッションII：メディア・リテラシー

- メディア・リテラシーの概念を理解する。
- 受信者として情報を選択する方法を識別する。
- 情報発信の倫理的な方法を概説する。

活動

- メディア・リテラシーに関するビデオ鑑賞
- 別の角度からニュースを見ることや、話を受け止めることについて議論した。
- 批判的に評価し、信頼できる情報を取得する方法を共有した。また、メディア・バイアス、メディア・スピン、アジェンダ・セッティングについて認識した。
- メディア利用とメディアの倫理的利用に関して、プラス面とマイナス面を共有した。
- 伝言ゲーム

成果

- メディア・リテラシーによって、人々が情報受発信のため異なるメディア・プラットフォームを活用できることを理解した。人々が与えられた情報について批判的に考えることができるよう教え導くことが必要である。
- 異なる形態で現れる可能性がある、メディア・バイアスについての知識を深めた。情報受信者として、人々はある特定の情報源から入手した情報に対して意識を高め、批判的に考えることが必要である。
- ソーシャルメディア・ネットワークの利用者として、ネット上のコメント投稿により、プラスやマイナスの結果を生じるなどメディアの倫理的利用について思考を深めた。ネット上での発言は善意から始まったものでもコントロールが利かなくなり、ネットいじめに発展する可能性がある。
- 「伝言ゲーム」を通じて、メッセージが間違っして解釈されるなど、多くの人々を媒介することでどのようにメッセージが伝わるか認識を深めた。

フィリピンの課題別視察

施設：TV5

活動

- TV5事業局長、D.J. Santahana氏と、同社ニュース情報局ブランド・マネジャー、Raymond Joseph Caguin

氏によるプレゼンテーション

b. TV5の施設見学ツアー

視察から学んだこと

フィリピンのマルチプラットフォーム放送局、TV5を訪問した。自国のテレビ局を訪問したことがあるPYもいたが、多くのPYにとって初めてのテレビ局訪問であった。

まず大スタジオに案内され、ブランド・マネジャーからTV5について説明を受けた。写真撮影をし、7名がインタビューを受けた。

続いてPYは、ニュース事業局長によるTV5内の施設見学ツアーに参加した。ツアーではコントロール・ルームなどを訪れ、ニュースの生放送がクルーによって作られる様子を垣間見ることができた。

PYは、TV5が遅れを取らずに最新ニュースを発表するため、他の競争相手の動向を把握することが重要であることを学んだ。最新ニュースはまずTV5のソーシャルメディア・プラットフォーム上で発表され、次にニュース放送として流れていく。

TV5はテレビ番組やラジオ番組の他、ポッドキャストも展開している。また、興味深いこととして、TV5のラジオ番組の様子はTV5系列のケーブルテレビ局、Aksyon TVで生中継されている。

PYは、TV5がニュースやスポーツチャンネルとして自社のブランディングやポジショニングをするのとは別に、社会事業にも従事していることを知った。TV5はフィリピン全土において自然災害に苦しむ地域へ救急車や医療支援を提供している。

しかしながら、PYは二つのグループに分けられた後、複数の案内人が提供されていればツアーはより良かったであろうと感じていた。また、現場の意見を聞いて実態を知るためリポーターと話すことを期待していたが、その機会は実現しなかった。

グループ・ディスカッションIII：メディア・ツール

ねらい

- a. 社会において異なるグループがメディアを利用する。方法について比較する。
- b. 短い市民ジャーナリズムの動画を制作する。

活動

- a. 小グループに分かれ、フィリピンの課題別視察で学んだことについて振り返り、意見を共有した。
- b. 安全意識向上キャンペーンに関するビデオを鑑賞した。
- c. 政府、メディア、民間・公共が様々なメディア形態を情報発信にどう利用しているか分析した。また、政府の規制が存在するか議論した。
- d. 情報発信の責任について学んだ。
- e. 人々がメッセージ伝達のため、いかに積極的かつ効

果的にメディアを利用すべきかを話し合った。

f. PYは市民ジャーナリズムについて学んだ。

成果

- a. オーストラリアの鉄道安全向上キャンペーン「Dumb Ways to Die (愚かに死ぬ方法)」について学んだ。本キャンペーンは歴史上、三番目に人気がある公共事業の広告である。本安全意識向上キャンペーンは、耳に残るフレーズの使用、効果的なソーシャルメディアの利用、鉄道駅への独創的な壁サイズのポスター掲示などの仕掛けにより、公共の意識を大きく向上させ事故を減らす事に貢献した。
- b. 政府、NGO、民間・公共セクターによる大衆伝達の方法は異なる可能性があることを理解した。テレビやラジオなどの従来型メディアは現在も情報や娯楽のための主な情報源である。しかしながら、通常は従来型メディアに依存している政府など、様々なセクターにおけるソーシャルメディアの利用は拡大している。
- c. 各国における検閲方法の違いについて議論した。
- d. 大衆批判を利用しメディアに自身のニュース内容に責任を持ち続けさせる重要性について意見を交わした。
- e. 著名なアメリカ市民ジャーナリストのネット上のインタビュー動画を見て、スマートフォンを持つ一般市民がいかに影響力のある市民ジャーナリストになり得るかを学んだ。

グループ・ディスカッションIV：ソーシャルメディアを利用した社会・環境運動

ねらい

- a. メディアの発信がどのように人々の情報作成、発信、受信方法に影響するか認識する。
- b. ソーシャルメディアを利用して社会運動を促進する方法について比較する。

活動

- a. ソーシャルメディアの影響力に関するビデオを鑑賞した。
- b. 国別課題トピック2の発表を行った。社会意識向上や社会運動促進のため、地元の人物、著名人、組織がソーシャルメディアをどう利用したか事例を発表した。発表の後には質疑応答を行った。
- c. 様々な国のソーシャルメディアを利用した社会意識向上の事例において、何が効果的であったかを議論した。
- d. 各小グループから代表を一人選び、他の小グループの最も革新的で魅力的な事例を共有した。

成果

- a. 自国の政治運動や社会運動にソーシャルメディアがどのように利用されているか理解を深めた。ソー

シャルメディアを利用した運動により、資金集めを促進でき、特定の社会問題に関する公の対話や議論を引き起こすことができる。

- b. 発表を通して、ソーシャルメディアを利用した様々な社会運動が、大衆行動の変化や特定の社会問題に対する募金活動を引き起こすことを学んだ。例えば、タイの自転車普及運動、シンガポール公共交通機関のモラル向上運動、カンボジアの十代の虐待被害者への募金活動などがある。

グループ・ディスカッションV：統合メディアキャンペーンの設計

ねらい

- a. 市民ジャーナリズムに関する船内グループ活動を振り返る。
- b. プロジェクトの企画・立案とメディア促進戦略の設計を実践する。

活動

- a. 「Think before You Click（よく考えてからクリックする）」ポスターコンテストの結果を報告した。コンテストの上位入賞3チームは、ポスター・デザインのコンセプトを説明した。
- b. 複数のメディア・ツールを利用し、社会・環境問題向上のための事後活動に向けた企画・立案を行った。

成果

- a. 世間の注目を集め人々を魅了するには、ポスター・デザインの中に強いコンセプトが必要であることを学んだ。シンプルなメッセージとインパクトのあるビジュアルは効果的なポスターを作り出す。
- b. 事後活動プロジェクトを企画するための技能と知識を深め、自国で実行可能な事後活動について議論した。また、複数の社会活動を評価し、立案した。さらに、イベントを促進するためのメディアキャンペーンを設計した。

D. 決意・期待される今後の活動

PYは議論を通じてメディアに精通することの大切さを認識し、情報やニュースなど一つの情報源だけを信頼しないことの重要性を理解した。

また、メディア・バイアス、メディア・スピン、アジェンダ・セティングについての認識を深めた。PYは情報を受信する際により批判的になり、また、発信する際には慎重になるべきだと理解した。

さらに、ソーシャルメディア上のネットいじめに対してスタンスを取ることで、また、自らが発信したニュースについて発信者として責任を負うことの重要性を理解した。PYは社会におけるメディア・リテラシーの促進運動や活動に、より協力的になるだろう。

メディア戦略の設計に当って、PYは慎重に検討し、

また、効果的なコミュニケーションを確実にするため彼らが展開するイベントのニーズに応じていこう。

E. 評価・反省(自己評価セッション)

概して、ほとんどのPYがディスカッション活動について満足していた。情報とメディアに関する知識と見識を深め、導入プログラム開始時に設定したすべてのゴールを達成することができた。

特に、社会における従来型メディアと新メディアの影響力について、また、社会活動や製品を促進するためソーシャルメディアを活用する方法について理解を深めることができた。

PYはメディア産業の仕組みについて知識を得ることができた。多くはディスカッション活動の流を楽しむことができ、メディア産業に関する実用的な知見を得ることができたと述べた。

また、ポスター・デザインや市民ジャーナリズムを制作する実践的な活動の機会だけでなく、他の参加国のPYと一緒に活動する機会も与えてくれたことから、船内グループ活動が有効的であったと述べた。

F. ファシリテーター所感

第42回「東南アジア青年の船」事業のファシリテーターとして任命されたことは、精神的かつ知的に多くの実りがある経験であった。また、私の人生を多岐に渡り有意義に変えてくれた青年活動である、本事業に再び貢献することのできる大変光栄な機会であった。

2000年にPYとして参加した際、私はディスカッション活動委員長に任命され、異なる文化、宗教、専門背景を持つ青年たちの議論を進めていくという経験を積んだ。この経験により、今年度私はファシリテーターとして議論を進めていくだけではなく、彼らとPYとしての経験を共有し、また、青年に関係し理解することが重要な、情報とメディアに関する私の専門知識を共有することができた。社会変化が促進される社会において、青年はメディアの影響を利用する方法に関して力を持っている。

本事業を通して、私は間接的に将来様々な国でリーダーとして活躍するだろう青年の考え方や物の見方を育て、変えることができた。

したがって私はまず、日本の内閣府と一般財団法人青少年国際交流推進センターに、このような責任を遂行する役目を与えていただいたことに心からの感謝の意を表したい。

にっぽん丸に乗船する前、PYは東京で開催された日本・ASEANユースリーダーズサミットにおいてLYと交流することができた。これによりPYはディスカッション活動の準備ができ、LYにとっても本事業の恩恵を享受する機会となった。PYとLYは文化や言葉の壁にもかかわらず、お互いに意見を一致させていくことができ

た。将来、彼らが職業上で同じような状況に遭遇した際、このスキルは役立つことだろう。

課題別視察として、YouTube Space TokyoやマニラのTV5を訪問したことで、PYはソーシャルメディアと従来型メディアの発達について見識を深めることができた。PYの多くはYouTubeのオンライン動画コンテンツ制作や、ニュース生放送を含むテレビ局のニュース取材・制作など、制作側について学ぶことに興奮していた。

両施設では簡単な質疑応答の時間が設けられていたが、YouTubeアカウント保有者やテレビレポーターに直接質問できればPYにとって更に有益なものとなっただろう。PYの多くはYouTube Space Tokyoの施設を利用することのできる、いわゆるクリエイターと呼ばれるYouTubeアカウント保有者と直接交流すること、また、TV5のように急成長を続けるテレビ局のニュースやスポーツ番組を担当したベテランのテレビレポーターと意見を交換することを期待していた。

施設の見学や概要説明だけでなく、これらの人物と30分間の質疑応答ができる時間が設けられれば、特にこのような業界がどう社会に影響を及ぼすかという観点からPYはメディア産業の見識を更に高めることができただろう。

PYはすべてのグループ・ディスカッションにおいて、熱心に意見を交換していた。特に小グループに分かれたディスカッションでは、メディアの発達、検閲、コミュニケーション、プロモーション手法分析などの適切なトピックについて、より密接に議論することができた。また、自分の住む社会においてメディア・リテラシーや社会変化を促進する案を練り、共有することができた。

PYはまた、DG8の二大船内グループ活動であるボス



ター・デザインと市民ジャーナリズム動画の制作に熱意と創造性を持って取り組んでいた。

当初、静かで引っ込み思案だったPYが、徐々に自信をつけ積極的に発言するようになり、成果報告会では素晴らしい発表ができたことに私は感銘を受けた。私たちが前向きで急速な変化の渦中にいると知ること、ファシリテーターとして青年の能力育成に貢献しているという誇りを感じさせてくれた。

プロジェクトマネジメントのセッションでは、実行可能な事後活動を設計する一つのツールとしてPYがプロジェクトマネジメントのプロセスを容易に把握できるよう、ファシリテーターたちはプレゼンテーションや資料の作成に従事した。PYはプロジェクトを管理するため、また、目に見える成果を残すために必要なことを学んだ。

ディスカッション活動運営委員会もまた、今年度のDG活動の総まとめとして実施された成果報告会を成功に導くため重要な役割を果たしてくれた。

私はファシリテーターとPYに対する、管理官、管理部門、ナショナルリーダーの皆さんの航海中の熱心な御支援に心から感謝を申し上げたい。

また、各専門分野に秀でているだけでなくPYの育成に全力を尽くす、楽しく勤勉で思慮深いファシリテーターの皆さんと一緒に仕事できたことはとても光栄であった。

最後に私は、本ディスカッション活動成功のために貢献してくれたDG8の38名のメンバーに大きな賞賛を贈りたい。そして、ディスカッション活動開始時に設定した各自のゴールを達成できたことを嬉しく思う。彼らの積極的な参加、楽しもうとする姿勢、創造性と考え抜かれたパフォーマンスは、本ディスカッション活動を皆にとって楽しい経験にしてくれた。



3 帰国報告会（各国事後活動提案）

(1) 概要

12月15日、ディスカッション活動・事後活動セッションのまとめとして、国ごとに話し合った内容や意見を発表し、共有するとともに、「青年の社会活動への参加」について考え、行動を結びつける場として、船内ドルフィンホールにて帰国報告会が行った。

- 16:00-17:10 国ごとの発表
- 17:10-17:30 上村秀紀管理官からの報告

(2) 報告内容

1. 日本

プロジェクト名：Cross-Cultural Walking Rally

背景：

- 「東南アジア青年の船」事業での経験の振り返り - 集中的な異文化交から多くを学んだ
- 日本の現状 - 外国の人々に対してもっと心を開く必要がある

目的：

- 異文化に触れる、日本に住む外国人の生活を知る機会を提供する

対象：小学生（10 12歳）

概要：

- オリエンテーション：自己紹介と目標設定
- 徒歩ラリー：多国籍レストランや食料品店、インターナショナル・スクール、語学学校、宗教関連施設、短いホームステイ
- 体験：料理、民族衣装、ダンス、祈り
- 交流：日本語を学ぶ学生、国籍や人種が異なる両親を持つ学生、日本に住む外国人との交流
- 振り返り：意見や学びの共有

期待される成果：

プロジェクト参加者は、

- 自分の世界の外のことについて学ぶ意欲を持つ
- 外国人との交流に意欲的になる
- 他の異文化交流プログラムへの参加意欲がわく
- 異文化に対して寛容になる

それにより、社会が外国人を受け入れやすい社会と変化する

タイムライン：

2016年1月: 計画

2016年1-2月: 実施場所の選定

2016年2-4月: 交渉

2016年4-6月: 広報

2016年4-8月: 物品準備

2016年6-7月: 申込受付

2016年8月: 実施

2016年9月: 評価

2. フィリピン

プロジェクト名：SHINE

対象地域：ルソン島北部ベンゲット州イトゴン町ティンドンダン・バランガイ

目的：

- 質の高い教育の促進
- 質の高い初等教育の強化
- コミュニティ・ベースのエコツーリズム（CBET）の開発

概要：

健康教育

- 健康教育、一般的な病気、体重管理、血圧監視について、村の医療従事者の育成
- 医療活動の実施（ワクチン投与や医療用品の配布）

質の高い教育

- 初等教育における教員研修
- 青年のリーダーシップ研修
- 太陽光発電パネルの設置

エコツーリズム

- ツアーガイドとコミュニティ・ベースのエコツーリズム運営についての研修
- 基礎フィリピン語の研修

タイムライン：

2016年1-2月：ニーズアセスメントと地元コミュニティとの調整

2016年4月：対象地域における3日間の活動実施

2016年10月：Project SHINEの事後評価

3. ベトナム

プロジェクト名：Warm blankets.

背景：

- 幼い子どもたちの温かい衣服が不足。ベトナム北部の山間部では、履くズボンがないため、肌が赤くなっている子どももいる
- 多くの家族は農家で、その収入は一日あたり1ドル以下
- 子どもたちの食料も十分でない状況

目的：

- 山間部に住む貧しい子どもたちに温かい毛布を提供し、冬でも健康でいられるようにする
- 第42回「東南アジア青年の船」事業ベトナム参加青年全員の参加
- ベトナム事後活動組織の役割強化

対象：ラオカイ省、タ・バン小学校において恵まれな

い環境にいる生徒（6-11歳）

概要：

- 地方自治体との連絡調整
- 資金調達キャンペーン実施（ベトナム事後活動組織と共同）。船内同窓会、寄港地活動にて、寄付を募り、寄付者への土産としてラバーリストバンドを配布
- 子どもたちに毛布、衣服、文具を配布
- 音楽やゲームを通して子どもたちと交流

期待される成果：

- 小学生に毛布・冬の上着・文具のギフトセットを100セット配布する
- 子どもたちの冬の健康状態を維持する
- 第42回ベトナム参加青年と他の回の参加者とのつながりを作る
- 各国事後活動組織における同様の活動の実施の呼びかけ

タイムライン：

2015年12月17日：ロジスティック調整（物品購入、地方自治体との最終確認）

2015年12月18日：ギフトセットの準備、プロジェクト実施場所へ移動

2015年12月19日：プロジェクト実施

4. ラオス

プロジェクト名：Hand in Hand II “ Stop Ignoring Start Educating ”

背景：

- ラオスの地元地域（地元青年）における、感染症を予防する性行為の方法に関する認識は低く、教育が行き届いていない
- HIV/AIDSの流行の程度は低いとはいえ、増加している
- 社会にHIV/AIDSに対するスティグマと差別が存在する

目的：

- HIV/AIDSに関する基本的知識を提供し関心を高める
- HIV感染者に対する差別を撤廃する
- 若者がセックスやHIV/AIDSに関する課題について家族とよりオープンに共有できるようにする

対象：

地元コミュニティ：ヴィエンチャンのサントーン郡の高校生（15-18歳）とその家族や保護者（50-100人）

概要：

- 事前評価
- HIV感染者によるお話し
- HIV/AIDSや性感染症の基本知識
- コンドームの正しい使用方法の練習
- 写真展示（安全なセックスとは）

- ロールプレイ
- 事後評価
- スペシャル・キャンペーン：#SISE

期待される成果：

- 地元の青年とコミュニティ自体がHIV/AIDSに関する基礎知識を得る
- 地元青年は、HIV感染者も自分たちとともに社会生活を普通に送ることができるということを理解する
- 地元青年とその家族、特に親がより柔軟になり、セックスを共通の話題にすることができるようになる

タイムライン：

2016年1月：観察及びプロジェクト計画書の提出

2016年2月：関連機関との調整

2016年3月：データや物品の準備

2016年4月：プロジェクト実施及びラオス青年同盟とラオス事後活動組織への報告

5. ミャンマー

プロジェクト名：#i_was_a_child

背景：

- 僻地に暮らす子どもたち - 整った学習環境を得るのが困難
- 健康教育や知識の欠如
- 子どもたちは、蚊を媒介とする病気や食物を媒介とした病気に対する脆弱性が高い（例：マラリア、食中毒、デング熱）

概要：

- 2016年1月29日に1日プログラムを実施
- バゴー地方オクトウィン郡の学校にて実施
- 子どもたちへの健康知識の教育をねらいとする

期待される成果：

- 子どもたちの生活スタイルがより健康的に改善される
- 子どもたちはどのようなしたら衛生的でいることができるかを学ぶ
- 子どもたちは予防の効果を理解する
- 参加青年は「東南アジア青年の船」事業で得た知識を共有することができる

タイムライン：

2016年1月第1、2週：調査と資金調達

2016年1月第3週：必要物品の準備

2016年1月29日：実施

- 午前の部：衛生的な生活の仕方と蚊を媒介とする病気の予防方法
- 午後の部：健康的な食事の仕方と食物による病気の予防方法

6. マレーシア

プロジェクト名：SAVING NEMO

背景：

- 問題：サンゴ礁が全滅しかけており、海洋生物は生息場所を失いつつある
- 解決方法：関心を高め、マレーシアのペルヘンティアン島にて人工サンゴを移殖する
- どのような貢献ができるか：新たな海洋環境の創出、何百もの海洋生物のえさ、生息場所、保護、産卵場所の提供

目的：

- 関心を高める
- 海洋生息環境を創出する
- 海洋生物を保護する
- 「東南アジア青年の船」のダイビング・ポイントを作る

対象：地元の村人、生徒（13 - 16歳）及び大学生

概要：

下記の内容を含む4泊5日の活動

- 人工サンゴの移殖
- 地元の人との教育的活動
- ビーチの清掃
- ボートの塗装
- ダイビング・レッスンと認定

期待される成果：

- 海洋生物の生態系における生息地が増加する
- 海洋生物の絶滅回避が促進される
- 参加者が海洋生物の保護や社会貢献活動の重要性を認識する
- 生態系におけるサンゴ礁の重要性についての理解が促進される

タイムライン：

2016年1月：計画書や日程の作成、実施場所の決定

2016年1-3月：会議、SSEAYP インターナショナル（SI）ネットワークとのコミュニケーション

2016年2月：広報、ボランティアや関係機関の決定、人工サンゴの入手

2016年4月：実施

7. ブルネイ

プロジェクト名：Green Rangers Project “ Our Youth, Our Saviours ”

背景：

- 災害リスク軽減（DRR）に関する社会認識の欠如
- 自然災害に対する社会の準備態勢の弱さ
- ブルネイは環境保護推進国：国土の約70%は森林で、その多くは保護されている

目的：

- DRRに関する認識の向上
- 環境保護の推進
- 3Rs（ごみを減らす、再利用する、リサイクルする）の強化

対象：16 - 30歳の青年（50人）

概要：

- 形式：2泊3日のキャンプ
- 保健省、開発省、消防救助局や関連組織との共同
- 自然災害管理センター（NDMC）への視察
- 資金：協力者、協賛、登録料及び参加費、ブルネイ参加青年のコンティンジェントからの資金

活動内容：

- リサイクル品を活用した救助道具代用品づくり
- Beach Bunchとの共同清掃キャンペーン
- シミュレーション演習
- ディスカッション活動

期待される成果：

- 環境に対する関心や理解の向上
- 責任感の芽生え
- 実践的知識の向上
- 最終的に「よりきれいな環境」の構築

タイムライン：

2016年1月：計画 - 実行委員会、内容、予算編成

2016年2 - 4月：準備 - 承諾許可、広報、ロジスティック、チームの研修、協力者

2016年5月：実施 - 運営

2016年6月：振り返り - 調査、フィードバック、継続プロジェクト、SWOT分析

将来的な活動：

- School-to-school プログラム
- コミュニティ・ベースの啓発プログラム開始
- ミッション・デー
- メディアや環境団体との共同
- 植樹プロジェクト（Million Trees Projectとの共同の可能性あり）

8. カンボジア

プロジェクト名：3 IN 1 PROJECT - Angkor Green Bikathon

目的：

- 寺院保護と環境
 - サイクリングを通じて環境意識の向上を図る
 - グリーンツーリズムの推進
- 健康的で活発なライフスタイルの促進
 - 社会貢献とボランティア活動の推進
- 地域の図書館設立のための資金調達
 - 対象はシェムリアップ州のアンコール・トム中学校

概要：

第一段階：意識向上と資金調達

- 活動：アンコール・ワット遺跡群（40km）周辺におけるサイクリングのイベントを企画
- 時期：2016年6月中旬
- 主催：第42回「東南アジア青年の船」事業カンボジ

ア参加青年

- 共催：環境省、教育青年スポーツ省、観光省、その他
- 対象者：サイクリスト500人など

第二段階：第一段階で得た資金を活用しての地元の学校支援

- 活動：アンコール・トム中学校に図書館を設立
- 時期：2016年7月中旬
- 主催：第42回「東南アジア青年の船」事業カンボジア参加青年
- 共催：教育青年スポーツ省及び民間スポンサー
- 対象者：シェムリアップ州のアンコール・トム中学校の地元青年を含む学生

期待される成果：

第一段階：

- 500人以上の参加者
- 様々なメディア報道による認知度向上
- 第二段階に向けて約8,000ドルを調達

第二段階：

- 2,000冊以上の教科書を備えた図書館の設立
- 資金調達と図書館員へのサポート

タイムライン：

2016年1月：実行委員会の立ち上げ、人材探し
2016年2-3月：手順確立と登録
2016年2-5月：スポンサー探し
2016年5-6月：最終準備
2016年6月：第一段階の実施
2016年7月：第二段階の実施
2016年7-9月：モニタリングと評価

9. インドネシア

プロジェクト名：#iYES (Indonesian Youths 4 Environmental Issues 2 the Society)

目的：

- 災害リスク軽減（DRR）の普及
- DRR及び環境問題に関する感心を高める
- 災害からの回復力が高いコミュニティ構築への貢献

背景：

- インドネシアの地理的状況からみたDRRの緊急性
- DRRに関する情報の欠如
- 2015年のASEAN Community (AC) 設立

概要：

- 試験的に短期プロジェクトを実施した後、インドネシア全土の27州において、それぞれの地元のニーズに即したプロジェクトを実施する
- 2015年12月19日に1日プロジェクトを実施
- 対象：ジャカルタの高校生
- 資金：JASEANタンブラーの販売 - ASEAN Community 2015とGreen lifestyle

詳細：

- フォーラム、共有セッション、セミナー、ワークショップ
- 携帯電話アプリとウェブサイトを通じた電子書籍（解説画像）
- DRRのモジュール・パッケージ（ちらし、冊子）
- ソーシャルメディア・キャンペーン - #KnowDisasterNoDisaster

期待される成果：

能力向上に向けての準備

タイムライン：

2015年12月：#iYESプロジェクトの試験実施及び#KnowDisasterNoDisasterの開始
2016年1 - 2月：27州でのプロジェクト準備
2016年3 - 5月：27州でのプロジェクト実施、月に1度のモニタリングと評価
2016年6月：6カ月報告、評価

10. シンガポール

プロジェクト名：The Ripple Movement.

目的：

- シンガポールの恵まれない状況にいる人々について、地元の青年の関心と理解を高める
- 上記二つのグループの人々の交流を促進する適切な環境をつくる
- 社会において良い変化をもたらす存在であり続けることができるよう、青年のボランティア精神を育成する

対象：中等及び高等教育機関に所属する13歳以上の青年

概要：

第一段階：関心と理解を高める

- 活動前の導入セッション
- 主な活動（例：視覚障害者とのジョギング）
- 事後の振り返り
- メンターシップ

第二段階：計画と実施（フォローアップも含め）

- 今後のコミュニティ改善プロジェクトにおいて青年を支援

期待される成果：

- 恵まれない状況にいる人々に対する青年の理解が深まる
- 青年のコミュニティ・サービス・プロジェクトへの参加意欲が高まる
- ポスターデザイン、教室での体験共有、人前での発表などを通して、友人や関係機関に青年が自らの経験を共有するようになる

タイムライン：

2015年12月：プロジェクトを共同で実施できそうな団体等への連絡
2015年12月 - 2016年1月：企画・準備

2016年1-2月：プロジェクト・パートナーとともに詳細の最終調整

2016年3 - 5月：プロジェクト実施準備

2016年6月：プロジェクト実施

11. タイ

プロジェクト名：SSEAYP SAYS -Hug Me Please

目的：

- タイ社会におけるHIV/AIDSに対するスティグマを軽減し、HIVとともに生きる人にも他の人と同じ様に生きる機会を与える

概要：

第一段階：HIV/AIDS教育及び大学生を対象としたHIV/AIDSのスティグマ軽減についての短編映像コンテンツ

- プロジェクト準備：行政や民間組織との調整、スポンサー探し、プロジェクトとコンテンツ周知のための口コミ動画の作成
- プロジェクト参加者全員の研修キャンプ：HIV/AIDSやタイ社会でHIV/AIDSに対するスティグマを軽減するために考えられる方法について教育
- キャンプ終了後：参加者は1ヵ月間で短編映像を作成

し、ソーシャルメディア上に公開

- 最後に、映像に対する「いいね」の数や閲覧数及び委員会の得点により判断された最優秀短編映像に国王杯賞が贈られる
- 受賞映像は公開されるとともに正式な機関でも使われる

第二段階：学校、大学、タイの青年に人気の場所、ソーシャルメディアにおける「Hug Me Please」キャンペーン

- HIV/AIDSに対するスティグマを軽減するための社会的関心を高める

期待される成果：

タイの青年は、彼ら自身のHIV/AIDSに対するスティグマを軽減し、HIVとともに生きる人に対しても他の人と同様に接する

タイムライン：

2016年1-2月：プロジェクト準備と広報

2016年3月：HIV/AIDS 研修キャンプ

2016年4月：短編映像制作と公開

2016年5月：表彰

2016年6-8月：「Hug Me Please」キャンペーン